コ-3737

178.8
I.99

天理教

文學博士 井上頼圀氏序
前代議士 出水彌太郎 編述

昭和
10 2 10
閲了

總目次

一序文……自一頁……至二頁
一小序……自一頁……至一八頁
一本論(四十八章)……自一頁……至一二九頁

●世界の創め……一
●日本の創め……四
●世の本源……七
●心の穢れ……八
●神の御使……一三
●唯一の神……一七
●優しき教……二〇
●世界を映す鏡……二三
●世界同胞……二七
●天啓の聲(一)……三〇
●天啓の聲(二)……三四
●安心立命……三七
●人の行くべき道……四〇
●神人和合……四四
●此世の極樂……四六
●懺悔……四八
●病の源……五〇
●教祖の同情……五二
●三歳兒の心……五五
●深き思案……五七
●勇猛心……五九
●甘露臺の建設……六一
●献身的勞働……六四
●扇の喩……六六
●迫害(一)……六九
●迫害(二)……七二
●犧牲……七五
●教會(一)……七八
●教會(二)……八一
●教會(三)……八四
●迷信……八八
●心の田地……九〇
●地場定め……九四

●意義ある勞働……九六
●大工の伺……九八
●四名の棟梁……一〇〇
●造營落成……一〇二
●教導職の務め……一〇五
●教徒の階級……一〇七
●禮　拜……一〇八
●教　典(一)……一一二
●教　典(二)……一一四
●天理教の獨立……一一五
●誤解の基(一)……一一七
●誤解の基(二)……一一九
●御神樂歌讀み方……一二一
●信徒の心意……一二三
●結　論……一二六
以上
一教祖略傳……自一頁……至一五頁
一天理教典……自一頁……至五二頁
一天理教唱歌（曲譜共）……自一頁……至一八頁
一神の御國（曲譜共）……自一頁……至一二頁

目次終

序

我が友、出水彌太郎大人は、浪華の地より選まれし前の國會議員にして、故品川子爵の君と政見主義を同うして、盛に我國の精粹を保存し、發輝せむことに努められし國士なり、このごろ大人の著はされし天理教の書を贈りて、われにその序を需めらる。

われ天理教につきては深く究めたることなきも、その書を一讀するに、その教の理を明かにし、その主神として崇むるところは外つ國より傳來せるもの、または他の神道より派を分ちしものに異なりて、我國の基を定めさせ給へる十柱神にして、代々の日繼の天皇はもとより、そが十柱神の御裔

に在はす所以を說き、神を敬ひ、皇を尊び、忠孝節義の守るべきことゞもを教へ、平和の國を現世に現はさしめんと期するところ、實にわが建國の基と一致せる愛たき教と謂ふべし、教祖中山美支子はもとより、庶人なりしも、信仰の篤きと忍辱の力强かりしより、遂に神の御旨を得て博く旨を宣べ、遍く教を弘めたり、本書また叙するところ微に入り、細に亘り、說きて飽まず、まことに國粹を領會し、尊皇愛國の信念厚き人ならずしては、茲に至るを得んや、究めずして譏るは迂なり、修めずして罵るは愚なり、信徒なるは勿論信徒ならぬも讀みてその精神のあるところを知るべきなり。

明治四十二年如月　　文學博士　井上賴圀

小序

悠久なる天地、擾々たる世界、國は參差し、人は錯綜す、昊天茫たり、大地漠たり、國相鬩ぎ、人相爭ふ、茫漠悠久なる天地、峻嶮嵯峨たる行路難、是れ人生の眞相にあらずや。

凡そ世界の原始に在りては、人類の數も極めて少かりきと雖も、其の漸を追うて增加するに隨ひ、相互に種々の關係生じ、隨ひて競爭起り、種族境遇を同うする者相集り、他の種族の侵畧に備ふ、斯る時代には暴力を以て暴力を制するの狀態にて、强き者は即ち種族の長となり、弱き者は此に征服せられ、一種畏怖の念より、崇拜の心をも生ぜり、然れども未だ今日に於けるが如き、信仰なく、又宗教なるものあらざりき。

世は益々進み、人類の思想復雜となるにつれ、暴力に據る侵略競爭は漸次減少せりと雖も、人類の增加に伴ひ、自ら生活の困難を感じ、隨て生存競爭の發生となり、自己の計をなすに急にして、他を顧慮する者日に其數を減じ行きて、心に惑ふ者は、是より人力の甚だ賴み難きを覺り、他に慰安の道を求めんとするに至り、絶大なる力を憧憬するの心爰に生ず、宗教の必要は茲に興れるなり、人誰か慰安なくして、安んじて生活を爲し得べき、又誰か凡の上に坐するを欲する者あらんや、世路の難に遭ひたる事なく、思想單純なる人にありては、信仰なく、又未だ宗教の必要を悟らざる者あり、斯くの如きは幸福なるが如くにして、實は却て然らず、如何となれ

ば、人生の行路は多く平坦なる能はず、浮世の波濤は穩なる時少し、今若し世に處するの策を誤り、一朝道沮み、船の覆らむとするに遭はゞ、徒らに天に叫び地に哭するのみ、果ては醜き最後を遂ぐるに至らむ、此時に當り、泰然自ら處し、笑ふて死に就く者は、即ち信仰を有し、心中自ら慰安の道を知る人なり、されば人として如何に百科の學術に造詣深くとも一の高遠なる靈的宗教心を有せざるものは、恰も皇帝の在まさゞる宮殿の如く、徒らに外觀の邃美壯麗を極むるのみにして、毫も尊敬するに足らざるなり、然り信仰の要は爰にあり、信仰を有する者は常に安んじて事に從ひ、危難に遭遇するも、平然たるを得、吁信仰を有する者は幸福なる哉。

已を犧牲として、他の不幸を救はんとする者は少く、慰安を人力に求めんとするは難し、茲に於てか人各々我心の内に、自ら慰安の道を求む、是信仰の起る所以なり、我心の内に我を慰むるの力あり、此靈妙なる力こそ、天地創造の神と合致する所のものにして、到底今日の自然科學の羈絆に束縛せらるゝ學理にては、容易に知り得べきものに非ざるなり、信仰は人各々の心にあり、神の力に據り、名に依りて、此信仰を導き、以て人類慰安の道を與へ、居常其所を得せしめむとするものは即ち宗教なり、されば宗教は何れの世、何れの國にもあり、唯時と處とに依り、風俗と習慣とを異にするに依り、崇むる所の神と、其說く所とを異にすと雖も、最後の目的に

至りては變る事なし、而して從來我國に行はるゝ宗教は儒佛耶の三教を以て重なるものとし、今日に於ては儒教は殆んど廢れ、佛耶二教は其初め異教蠻教と看做され、國體に害ありとして排斥せられ、爲に戰爭さへ惹起せる時代ありしに拘らず、今は既に國人の疑惑も去り、敢て國體に何等の害をも及ぼさゞるのみならず、却て我國の文化を助けたるの力は、實に偉大なるものなり、而も初めより我國體を基礎として起れる宗教あるを見ざりし事、實に二千有餘年、時は維れ紀元二千四百七十八年、山水秀靈なる舊都大和の地、俄然赫燿たる光明の現るゝものあり、天理教祖の出現即ち是れなり。

古來我國には神道なるものあり、他の宗教と異なり、我國土の發生と共に興り、國體を基とし、又國體と共に存在せり、天理教も亦神道に屬し昨四十一年まで其一教派に隷屬す、然り而して神道の淵源たるや信仰を基とし、濟度を目的として興れるものに非ず、國體と共に存在せるの故を以て今日に至る迄、時に一盛一衰ありとは謂へ、他の宗教の如く絶對的衰頽に歸せしを見ず。

我國は固と國土發生以來他に比類なき美なる歴史を有せる國なり、則ち神は我國土の創造者にして又國人の祖先なり、代々の神々は、相繼ぎて子孫の爲め、國土の爲に御心を用ひさせ給ひ、降て人皇に至り、延きて今日に及ぶ迄、萬世一系

皇統連綿として盡きず、故に天皇は即ち我が民族の本宗たりし神の統系に坐して、國民は畏くもこの本宗たる天皇の末裔なり、然れば國土の初より、君は臣を愛し、臣は君を敬するの念篤く、禮儀正しくして、長者の沒するあれば、宮を建て祭壇を設けて其靈を祭り、神籬を建て榊を飾り燈を獻じ、朝夕禮拜を怠らず、有事の時に臨みては即ち、神前に額きて報恩の誠を致し神意に聞く等、恰も生者に仕ふるが如くす、斯くして生前に於て崇拜者多かりし人は、沒後に於ても亦崇拜者多し、此美風が典禮となりて後世に傳り、之を神道と呼ぶに至れるなり、毫も救靈を意味し濟度を目的として起りしものに非ず、我國人に祖先崇拜英雄崇拜の念熾なるは、蓋

し此に基くものにして、忠君愛國の念も亦當時より傳りしなり、故に後世神官神職等、專ら祭祀を司る職務を設けられきこ雖も、布敎傳道者と同一なるものに非ず、鎭守神社には、各其格式に從ひ又鎭坐の場所其他の事情に因り、何れも多少の氏子を有すと雖も、氏子は信徒と同視すべきものに非ず、隨て神社は敎會寺院等と全く其性質を異にせり然れども、其の參拜する人々の心は、寺院敎會と鎭守神社とを論ぜず、其信念に於ては何等の差異あるを見ずと雖も、一は崇敬の念にして、一は憧憬の念なり、故に其對象より受くる靈的觀念の結果に於ては聊か異るものあり、隨て神道は全き宗敎と認るに踟躕せざるを得ず、されば宗敎的競爭を以て神

道を滅さんとするも、而も到底爲し能はず、蓋し神道は我國體の精華が、形に顯れて神代より傳はれるものなればなり、然れば神道若し滅ぶるの時は我國體滅亡の時ならざるべからず、然り而して天理敎の敎理たるや建國の基を唯一の神に歸し、唯一の神の裔分れて我國建國の基を分掌したりと說き、儒佛耶三敎と其趣を異にして特に我建國の起始と合體一致せしめ、以て人類の向上を計らむとしたる處に、甚深の妙趣あるものと讃嘆せざるを得ず。

我國素と宗敎なし、故に一度佛敎の傳來するや、猛火の原野を燎くが如く、鷲鷹の燕雀を搏つが如き勢を以て、社會の全部に蔓延し、一二皇學者の反動ありと雖も、例へば一掬の水

を以て車薪の火に濺くが如く、非常なる勢を以て傳播せり、是我國人の久しく信仰に飢え、未だ一人の宣教者なく、依りて慰安を求むる處を知らず、殆んど煩悶懊惱の極に達せる時に際し、輸入せられたるものなればなり、然るに其益々隆盛となるに隨ひ、佛徒にして神道を倒さんと謀りし者ありきと雖も、何れも功を奏せず、茲に於てか彼等は逢迎主義を執り、故高山博士の論ぜしが如く、聖德太子の四天王像となり藤原氏の興福寺となり、本地垂跡說となり、神佛一體說となり、在家外護の願となり、皇佛大同團となり、以て巧みに信徒を糾合せんとせり、又一方には神道中にありても、神道を宗教化せんとする者生じ、其手段を佛教に倣へるものあり

と雖も、未だ我國體を基礎として生ぜるものと云ふを得ず、亦大成せりと稱すべからず、獨り天理教に至りては、天保九年十月二十六日、教祖中山美支子が、初めて神靈に感應し救世濟人を宣して以來、僅に七十二年、而も著しき發達を爲し、現在信徒の總數實に四百三十餘万人、教會總數二千四百餘ケ所、教導職の數二萬餘人、東西兩本願寺と共に我國各宗派中最も盛況を示すに至れり。

惟ふに佛耶兩教の如き、數千年間、世界多數人心の信仰を支配し來りたる大宗教さへ、漸々衰運に傾きつゝあるに際し、獨り天理教が僅々の歲月に斯くも、偉大なる發達を爲せし所以に就ては、其原因素より種々あるべく、到底此小序に於

て盡すこと能はずと雖も、其二三を擧げて撿覈すれば、自然科學の進化說に適合して、人類の向上を鼓吹し、他の神道より分れし宗教の如く、異教に倣ひて餖飣補綴せるものにあらず、教祖が神靈の感應に依り、十柱の神を戴きて天理を說き、敬神忠君愛國を以て人を信仰に導き、慰安の道を宣傳し、遠く我建國の精神に淵源し、能く我國體に適合し、國民的意識を覺醒するに充分なる刺戟を有したるが、其發達を促したる唯一の原因をなせしに外ならず、而して其戴く所の神が神道の十柱神と其名を同うし、禮拜其他の儀式に於ても酷似せるものあるに因り、從來我國制上、神道管轄の下に屬せしこ雖も、事實に於ては、最初より獨立の宗教として發達

し來れるなり、其十柱の神の如きは教祖の神憑に依りて奉戴せられしものにして、神道の十柱神と同じく殊に其教理を究むるに、十柱神も其靈源に遡れば、即ち一神に歸し、其妙用を分てば萬神に亘る、蓋し造化の大源にして萬有の根本なり、今此靈源の妙用たる八百萬神中、靈德の最も顯著なる十柱の神を擧げて奉祀すとは、天理教典に於て明示する所なり。

されば天理教は單純なる神道と異なり、人類濟度を目的とし、因緣の說、淨土の說等を根本教理としたる宗教なり、又教祖が固と淨土宗の熱心なる信者たりしの故を以て、天理教は佛教より出でたるものなりと爲す者あれども、佛教が未

來のみを說き、人類生存の根本原因を推して、無明となし、涅槃は一切煩惱を解脫して、不生不滅無爲寂滅の妙境となす、厭世無爲を鼓吹する消極的宗教なるに反し、天理教は現世に於て、樂土を建設せんとする新宗教にして、所謂其樂土は世界外なる十萬億土の彌陀淨土に非ずして、吾人人類の精神及び行動にして天心に合ひたらんには、苦痛罪惡悲哀の妖雲何時しか消滅して、天人一致の淨土實現すべしと主張する、進化の大法に從ひたる樂天教なり、決して佛教より出て、佛教を學びたるものに非ず、天理大神が普遍悠久の實在神にして、源を尋ぬれば一神教たるの故を以て、基督教と何等かの關係なきやを疑ふ者ありと雖も、是亦佛教と等しく、

何等の關係を有せず全然別個の宗教なり。

斯の如く天理教は我國體を基として興れる、唯一宗教と稱するを得べく、教祖宣傳以來日尙ほ淺きに拘らず、既に多數の信徒を有し、其間有ゆる迫害に遭ひ、政府の干涉を受けたりと雖も、遂に屈せず、明治四十一年十一月二十七日、終に內務省より獨立を認可せらる、然るに天理教は從來幾多の非難を受け、現在に於ても亦攻擊の聲を斷れず、斯くの如きは過渡時代にあるものゝ、免れざる迫害にして、世人の誤解と曲解に出づるもの多し、畢竟反對者が公平なる考量を遂げずして、豫め猜疑嫉妬又は憎惡の念を以て、教義の言說を臆度したるに因らずんばあらず。

苟も一の新宗教を唱道するものが、其初、多少の反對に遭遇するは、極めて通例の事にして、免れざるの數なりとす、されば天理教を批判せんと欲せは須らく其他宗教に對する先天的反對論を超越して、批評的立場を取らざるべからず、若し猜疑嫉妬憎惡の見を以て之に對すれば、一片の塵影も盈尺の美を暈らすに足る、願はくは、眞面目に天理教を觀察し、研究せむことを望む、其實體を知らずして、徒らに批判惡罵を逞うするは、眞に是菽麥河嶽を解せざる夙斷にして識者の所爲にあらず、而して又天理教教導の職に在る者、及び其信徒中に在りても、理論を重んぜず實踐躬行を主とするが爲め、亦已が宗教を誤解して財産を濫りに消費し、或は進歩

したる醫藥を重んぜざる等の風ありて、其教旨に悖るが如き者なしとせず、此の如きは大に愼まざるべからず、依て本書は茲に天理教の如何なるものなるかを、廣く世間に紹介し以て其誤解を釋き、一方には教導の職に在る者並びに信徒をして神意に反くが如き事なからしめんと欲するものなり、若し夫れ宗教上の見解よりして天理教と爭はんとする者、本書に據りて其眞髓を明かにし、以て鋭鋒を磨くを得ば幸なり、唯だ學理的研究の範圍内に於て、知り得ざるの故を以て、神の存在を否定し、神憑其他靈的神秘的事實を否認する者の如きは、全く宗教を論ずるに足らず、而して本書は可成的議論を避け、文章の如きも力めて平易明暢を旨とし

其大要を傳ふるを以て主旨とす、詳論に至りては稿を改めて更に公にするの日あるべしと云爾

今上即位四十二年二月

東京にて　出水彌太郎述

本書を編述するに當り天理教管長中山新治郎氏及び權大教正松村吉太郎氏が甚深の厚意を寄せ教典天理唱歌及神の御國の載録を認められたるは深く編述者の感謝する處にして尚ほ敬虔切實の態度と共にこの編述を完成し得たることを祝福するもの也。

天理教本論

天理教

世界の創め

出水彌太郎編述

物には必ず其の因りて來れる淵源あり、淵源あり即ち其の結果なかるべからずと說くを以て因緣の說とは云ふ、是れ佛敎にても亦唱へらるゝ處にして、天理敎の敎祖「おや樣」は此說を大本として其の敎を說かれたるものなり、人は如何にして此世に生れ出でたるか、父母の生む處なり、父母は何處より來りしか、更に是を生める祖父母あり、祖父母に曾父母あり、斯くして際限なく吾人の因りて來れる淵源に遡ぼれば、必ずや或る單一なる何者かに歸着せざるべからず、單一なる或る者とは何なるべきか、是れ絕對無限の力を有せる者ならざるべからず、絕對無限の力を有する者にして實に萬人の崇め尊びて、終始其の命に聞かざるべからざ

る神なり。

神は世界の森羅萬象の本源にして絶對無限の力を有ち給へり。神は始め天地を象りて夫婦を造り給へり、是れ實に世界の創めと云ふべきなり、何となれば廣漠たる國土はあらんも、此處に生息する人類なくんば、开は何等の意味なき一個漠たる土壤に過ぎず、神夫婦を造りて此土に降し給へり、爾來幾千年神子たる夫婦の生める人類は到る處に繁殖して幾千億を數ふるに至り、以て今日の世界を象くるに至りたるものなり、されば教祖の手づから書き遺し給へる御神樂歌の序歌にも『此世の地と天とを象りて、夫婦をこしらへ來るでな、是れぞ此の世の創め出し』と說かれたるは即ち如上の理由に外ならざるなり。

神は絶對無限の力を有し給ひて森羅萬象の本源なり、語を換ふれば森羅萬象、一草の微、一木の細に至る迄悉く神の創て造られたるものと云ふも誤りなかるべし、神は人類に總ての者を與へ給へり、而して我等をして生ましめ給へり、人類が

此土に生息し、春夏秋冬、暑からず、寒からず、飢えず、渴えず、生命を保ち得る所以は、父母の慈育、天皇陛下の御恩澤に因るは素より言ふ迄もなけれど、其本源に遡ほれば、人類をして今日あるに至らしめ給ひたる、大神の御惠みに外ならず、されば信徒なるも信徒ならぬも此の絶對無限の大御力を有ち給へる大神の靈妙なる攝理を渴仰服從して、一日たりとも感恩禮拜の念を胸中より離さず、行住坐臥、大神の趣旨に副はむことを念とせざるべからず。

神は世界を創造し、人類をして今日あるに至らしめ給ひしのみにして遠く去りて在まさぬにあらず、末來永劫不朽の御生命を保ち給ひて、形こそ顯はし給はずと雖ども、萬有の形となり力となりて總ての物の中に存在し給ひて人類の善惡正邪を監視して正善を勤め邪惡を懲らし、天壤と共に窮りなく靈德を垂れ給ひ、日月の運行、四時の循環、時を違へず、刻を變へず、生成化育駸々として息まざる、誰か其威力の偉大なるを讃嘆せざる者ぞ。

日本の創め

世界を造り給へる大神は勿論、世界の一部なる吾が日本國をも造り給へるなり即ち大神は世界萬有の本源にして、靈妙なる威德を有ち給ふに因り、種々なる形に現はれ、數多の神に顯はれて、我が大八洲を造り給ひ、豐葦原瑞穗國てふ、芽出度大國の基を建てさせ給ひぬ。

我國の基を定めむが爲め顯じ給ひたる神々は頗る多くして、古より天神地祇八百萬の神と唱へまつれり、素より神々の數を八百萬に限りたるにはあらざれど、我が國語の綾として、數多き意味に用ゐられ、大神が我が國を創造し給ふに斯く迄多くの神と現じ給ひしを言ふものに外ならず。

今、此數多き神々の御名を悉く數へまつりて、崇めんは人の能く爲し得べき所にあらず、素より此の神々が我が國を創造し給ひし御靈德にいづれ優劣のあるべ

き筈はあらねど、就中靈德最も顯著にして幾千年の今日まで人の記たる神々十柱を、國常立尊、國狹槌尊、豐斟渟尊、大苫邊尊、面足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉冊尊、大日孁尊、月夜見尊と申しまつる、是の十柱の神を總稱へて天理大神とは云ふなり、即ち此の十柱の神を禮拜尊崇べば、其心自から神に通じて神と人と相感應して、所謂極樂の域に達するを得るなり、我が國は是等の神に由て創造られたるが中にも、伊弉諾尊、伊弉冊尊の二神は、實に我　皇室の御先祖に在はし、今日に到る迄幾千年、皇統連綿として絕ゆるなく、素より吾等國民は畏れ多くも我　皇室の子孫に外ならざる最とも有難き國民なれば、君民の關係最も親密にして、君は國民を見給ふこと、赤子の如く、國民は君を崇めて父母と爲す、上下一致、國富み兵强く、大君の爲めとし云へば、生命を一毛の輕きに比べ、忠勤を盡し、一國即ち一家能く睦び、厚く和し、相戒めて德を勵む、全く他に比類なき美しき國體と云ふべきなり、是れ我が　皇室が天理大神の体現し給ひたる伊弉諾、伊弉冊二尊の御裔に在はし

吾が國民は我が　皇室の子孫たる最も日出度國體なるの故にして、實に大神の旨に合致たるものと云ふべきなり。されば我が國の臣民たる者は誰も　皇室の崇むべきを心に銘記すると共に其の大本たる天理大神を崇び、一意專心其の敎に違はざらむことに眄むべきなり、左れば天理敎は素より日本國のみならず、宇宙萬國人類の心靈を救ふて安心立命の地に到らしむるを理想とすると云へども特に御神樂歌五下り目第九章に『此處は此世の元の地場、珍らし處が現はれた』とて、我が國が萬國に冠絶たるを讃美し、且つ日本國を最初の立脚地として益々此の有難き敎を世界萬國に及ぼし普ねく弘布せんことを宣言せられたり。同じく五下り目八章に『日本許りぢや無い程に、國々までも助け行く』とあるにても知らる、敎祖が一婦人の身を以て、斯る偉大なる覺悟を有せらるるに至りたる神の御心の攝理に驚嘆ずむんばあるべからざるなり。

世の本原

御神樂歌三下り目第一章に於て『日の本庄屋敷の勤めの場所は世のもとや』と示されたる大意は大和なる天理敎本部の御神樂勤めの場所は、世界を改新にするの原始地たることを指されたるものにして、一下り目第一章に於ては『正月聲の授はやれ珍らしい』二下り目第一章に於ては『正月踊り初めは、やれ面白い』とて、正月なる言葉を用ゐて、神の恩寵の初めて降れる歡喜の有樣を述べ、甘露臺建設の新らしき第一歩に踏み入りたる時期を示し給へり、此の第三章の冒頭に於ては甘露臺現出の原始の地は天理敎本部の勤場なりと場所を示し給へるなり、恰も王者の國を建て紀元を改め、都を定むるが如く、天理敎が世界を統一すべき第一着歩の時期、場所を明示し給ひたるなり、初句、大和と云はず、日の本と稱せられたるは、暗に我が日本國が世界の根本となりて萬國を指導し、萬國の魁たるべき意

を言ひ含められたるなり、實や我が國は世界に比類なき神の御裔なる皇室を戴き、國民は畏も　皇室の分岐にして、君臣宛然親子の關係に於けるが如く、一國一家の如く相睦び相和せる芽出度國體なるは、實に萬國に誇るに足る所以にして、かゝる國體を有てる國家こそ、始めて世界の最上首長國たるべきを得るなれ、畢竟、日本は萬國の模範たる國にして、日本の模範たるべきは庄屋敷の本部なり、本部の勤め場なりと宣ひし眞意は、神の恩寵と共にある處こそ、世界の原始なりと仰せらるゝにあり。御神樂歌第十一下り目第一章の『日の本庄屋敷の神の舘』とあるに照し合はして、能く〳〵考ふべきなり、世の原始は各人の心なり、心の集團なる庄屋敷の勤め場なり、之を廣めて云へば我が日本國なりと云ふなり。

心の穢れ

世界も人類も、宇宙の萬有は悉く神の御惠みによりて美しく造られ、飾られ、一事

一物悉く神の支配の下にあり、神の支配の下にある者は神より借物と言ふも不可なし、世に借り物を取扱ふに吾が所有てる物を取扱ふより粗末にし、特に疵附け穢して平然なる者は殆んどあらざるべし、萬一期せずして他人よりの借物に對して過失ありとせんか、恐懼百方之を陳謝せんと欲せざる者あらんや、人類の形體は勿論人類の良心も亦神の支配に屬し、神よりの借物なりとせば、人は絶えず、神よりの借物なる形體は勿論良心に對しては造次顚肺丁重懇切に取扱ひ、其の用途を完全ならしめ、其の用途を果したる後は即坐に之を返却さざるべからず、即ち借物なり、貸主に於ては何時其の返却を迫らんも計り難く、其の催促に當りては常に速かに返却に應ずるの準備なかるべからず、其の準備とは如何、其の使用間に於ては絶えず、周到なる注意を拂ひ、些の汚穢、疵瑕を留めず、清朗透徹明玉の如くならしめざるべからず、身體に於ける汚穢は沐浴齋戒に由て清むるを得べく、疵瑕は或は巧妙なる醫術を以て治すを得べしと雖ども、良心に於ける疵

穢、疵瑕は何を以て清め、何を以て治すを得べきか、神は人に貸すに明晃々たる良心の珠玉を以てせられたり、人は此の珠玉を穢し、疵付けんことは思ひもよらず、益々琢磨して其の光輝を發揚せざるべからず、是れ人が神なる貸主に對して正當に支拂ふべき謝禮なり、誰か他人よりの貸與に謝意を拂はざる者あるべきや。そはこまれ何をか良心の穢れと云ふ、神は之を八埃と說き給ひ、萬有罪惡、總ての禍害の淵源となし給へり。御神樂歌の中に『やさしき心』『きよき心』『まごゝろ』『やわき心』とあるは、無慈悲心、貪濁心、虛僞心、奸惡心を裏面より說かれしものにして、凡そ之を八種に分つを得べし、即ち(一)貪婪(二)慳吝(三)偏愛(又)邪愛(四)偏憎(五)怨恨(六)忿怒(七)邪慾(八)傲慢即ち是れなり。

以上の八種の罪惡は即ち良心の穢れなり、貪婪より傲慢に至る八種の罪惡を若し其の唯だ一つなりとも他人より仕向けらるゝことあらんか、不愉不快なる實に忍ぶ能はざるものあるべし、誰こて已れの欲せざる處を人に施さんと欲する

者あるべき、理論に於ては眞に右の如くなるべきも、世の進み、人の殖ゆるに從ひて、生存競爭の起るありて自からの存在の爲めには人の不利不快を顧みざるの勢ひとなり、知りつゝも神の意に反くや實に久し、神は實に普ねく人類を監視し、常に心の穢れを清め、疵を癒さんことを勉め給へど、人は益々神に反きて邪惡の途に趨り洵に止まる處を知らず、神に反ける者は憐むべし、已れの心の穢れたるを知らず、之を知るも神を賴りて之を清めんと欲せず、甚だしきに至りては大神の渺なる末裔の微力なる身にてありながら、大神の絕對無限なる御力を信ぜず、盲ひたる眼を以て神を批判し自からは左る穢れを有たずと斷言るが如き暴逆を敢てす、實に言語に絕えたる邪惡道に陷れる者と言ふべきなり、自ら穢れずとする者は既に良心の珠玉、全然其の晃々たる光輝を失へる者なり、誰か大神の普遍透徹たる御眼を瞞まし得る者ぞ、大神は人が眞の闇夜に於てせる行爲に對しても瞰視を怠り給はず、否行爲のみならず人の心中に於て考へたること、思へること

とに就ても監視し批判し常に其の賞罰を怠り給はず、恐れて懼れざるべけんや然りと雖ども大神は只罪を悪くみ之を罰し給ふが爲めのみに在はすが如き、さる峻嚴なる方には在はざずして　陛下が國民の罪を罰し給へど正道を踏める者に對しては特殊の恩賞を授け給ふが如く、畏くも　陛下の祖先に在はす大神は、慈悲の心に富み、恩愛の情深く在はし給ひ、心の罪や穢や之を悪くみ給ふこと甚だしと雖ども我慢を去りて已が罪を懺悔し能く從順大神を賴らむと欲する者には快く救ひの大御手を擴げて御胸にかき抱き給ひ以て極樂淨土に導き安住を得せしめ給ふ心に穢れある人よ、我慢を去りて、已が良心に問へ、神より授けられたる珠玉の光輝は曇らずや、一毛の微疵だになく依然として圓渾なるや、夜更け世寂かなる時、眼を冥り、心を平かにして思へ。

慈悲なりしや貪らざりしや、僞らざりしや、怨みざりしや、懺悔せよ、神に賴れ神は眼に見、耳に聞く能はずと雖ども、到る處に在はす神、到らぬ隈なき大御力に、悔ゐよ、賴れ、然らば良心の穢れ自ら去り、疵自から癒えむ、只眞心より悔ゐよ、縋れ、口に御名を唱へ、形に御力を賴らむも、そは僞りなり、神必ず之を見破り給はむ、故に御神樂歌二下り目に『何程信神したとても心得違はならんぞえ』又九下り目に『慾があるなら止めて呉れ、神の受取り出來んから』こある、皆僞信を戒め、眞實、衷心より信神すべきを說けるものにして又心の穢れを去らずしては如何程禮拜渴仰するも神の受納し給はざるを云へるものなり。

神の御使

大神は到る處に普く在はし、御力は普ねく到らぬ隈なき此世ながら、尙ほ心の煩悶悲哀に撲たれて、絕えず惱まさるゝ者あるは現世の狀態なり、心の迷や他に賴りて晴らさんと欲するも得ず、悲や他に賴りて慰めんと欲するも得ず、五里霧中に彷徨へる者多きは古來よりの狀態なり、神既に在ませど萬人悉く救はれず、人

繁くして惱める者益多し、是れ何の故なりや人類の微細を以てして相互に相倚り相扶くとも、互ひに微力き者の相抱いて互に號泣するに外ならず、玆に於てか絶對無限なる神に縋らむとするの念油然として起るとも雖ども、人の淺き智惠を以てしは絶對無限の神に全力を捧げて信仰を拂ふに餘り疑ひ多く、悛巡として半ば疑ひ、半ば信じ、傍ら邪念を逞ふして神德に歸依せざるを以て、神も中々に救ひ給はず、却て全く善心に立ち歸り滿幅の信仰の起らむことを祈念し給ふと雖ども人類の奸邪心は人類の增殖ゆるに從ひ益々其威を增長して止まる處を知らず、斯くして世は混沌として、此世ながらに破滅せんかと思はるゝ際に當り、國體秀美き日本國、而かも殊に瑞雲鬱ける大和の地庄屋數に、大神の全能を授け給ひたる御使を降し給ひしなり、此の御使をそも誰とかなす、天理教祖、眞道彌廣言知女命、中山みき子是れなり。

教祖中山みき子は始め淨土宗の信者にして、常に神を敬ひ、國を愛するの志深く

已れを忘れて他人の苦痛を救ひ、人情の日に日に薄れ行くを慨き、斷然之を救濟はんものと心を凝らし、誠心誠意一身を擲ちて天神地祇に祈願を怠らざりしが天保九年十月二十三日、教祖四十一歳の時忽然、神憑に依り從來沈鬱る氣質の教祖は精神上一大變動を生じ、冥々裡に大神の大御旨を受けて、勇猛精進、世界の人類を救はんが爲め、全力を盡さるゝに至れり、然れども天理教は此の時に起れるに非ずして、大神は人間世界の日に日に紊れ行くを憐れみ、特に布教宣傳に適當なる教祖を御使として此世に降し給ひしものにして、教祖が生れて四十年の長日月は實に教祖が心靈界の人となる迄の神の試驗期にして、教祖が佛教の感化を受けて特に厭世の人たりしが如き普通の人ならんには、世を厭ひたる結果、自暴自棄遂に天命を全うするを得ずして或は慘ましき最期を遂げられたるやも知るべからず加之神憑即ち大神の使命を受くる迄の四十年間は實に教祖が精神に於ける苦鬪期間にして、基督の四十日間の斷食釋迦が六年の苦行も物かは、

而かも纖細き一婦人の身にして四十年間の苦行難行は、普通人の堪ゆべき處にあらず、教祖は基督の如く前代の書を研究せず、釋迦の如く深奥なる教育を受けず、されと信仰の熱誠、慈悲の心に至りては基督、釋迦に讓らず、心中の苦闘、世の罪惡と難戰し、屈せず撓ゆまず、狂せるが如く信神の道に入りたるは、實に神の之に命じ給ひしに據るとは謂へ、熱誠なる信仰に基くものにして、所謂神憑、とは神の御心の赫たる光が教祖の曇りなき心中の明玉を照らして、光彩陸離、混沌たる現世の罪惡を消滅せしめむとする、一刹那の狀態を云ふものにして、實に神人感應の極玆に至りたるに外ならす、教祖が此の狀態に至れる、即ち人類濟度の威力を充分に神より授與へられたる者にして、教祖の形體は四十歳以前と四十歳後と異る處なきも、其の精、神に於ては殆んど別個の人となれる者にして、教祖が此の域に達せる迄には、數十年間絶大なる信神、絶大の苦闘、絶大の慈悲ありて一朝玆に至りたる者にして、信徒たるも信徒ならぬも教祖の難行苦行に慣ひ、精進て神

の領域に近かざるべからざるなり。

唯一の神

教祖は神の命を受けて、人類に大神の御旨を宣傳し給へることは前章に述べたり、教祖說きて曰く、天地萬物は悉く神に依て造られ、神に依て育てられたるものにして、總てのものを造り育つるには、各々分掌の神々ありて、其數八百萬の多さに及ぶと雖ども、其の靈德に遡ぼれば一神に歸し、其の妙用を分くれば多くの神々に亘る、此理に依れば神は造化の大本にして、萬有の根本なれば、尊ぶべく敬ふべきものなりとて、八百萬の神の內より十柱を擧げ、之を天理大神と尊崇せられたり、之を詳說すれば、天地萬有を支配し、生成化育、調攝天理、靈德妙用、實に廣大無邊の趣旨あり、大神は多神に現はれ給ひて、如上の靈德を施し給ふと云ふにありて、此の大神は實在の神と認められ、人類の眞心と存在するの神と認められ、人類

濟度の原動力を有する神と認められ、人類の原始なる親と認められたるものにして、天理大神こそ、血あり涙あり骨ある、圓滿具足、完全無缺の神に在はして、同時に普遍き神に在はし、力ある神に在はせば、事物の生じては滅し、滅しては生じ、變化は極まりなきも皆神の妙用に外ならず、故を以て、自らの罪を悔ゐて神を賴らば、神の御力は總ての上に及ばぬ隈もなければ、悉く心を清められ、以て安住の樂土に住むを得べきなり。左れば教祖も御神樂歌五下り目に『水と神とは同じことと心の汚れを洗ひきる』と說かれたり。此世界を濡ほす水なくては、人類は一日も生息するを得ず、雨となり、雲となり、谷川の水となり、大海の潮となる、形は異れど水は矢張り素の水なり、雨となるや、五穀を實らし土壤を肥やし、雲となるや變幻極まりなく天を彩り、谷川となりては生物の渴を醫し、潮となりては船を泛べ鹽を供給す、用途こそ異なれ、水は矢張り素の水なり、雨となり雲となり、川となり、海となる其の源は一なり、人類の認めて以て神と崇むるところのもの、其の末は殊なれど、其の源たるや一なり、神は其れに等しく種々の形には現はれ給へど、其源に遡りては唯一の神に歸着なり。而して水なくて人類は生息し得べきか、神なくして人類は安心立命の樂境に生息し得べきか、穢れたる者は洗はざるべからず、神に由て清められざるべからず、人類は水を欲するが如く、神を欲せざるべからず、水に浴するが如く神に清められざるべからず、尙ほ他の方面より云へば表面より見て澄めるが如き水も、其の底に至りては聊かの汚泥を留めざることなきを保せず人類を水と假定せよ、吾も人も澄めり、潔白なりと、思ふ心の底に立ち入りて神の見給はんか我慢の心、奸惡の意、聊かもなしと斷言し得る者は神前の勇者なり、神前に於て我が心の水澄めりと告して憚るなきに至らむこそ望ましけれ。さあれ、多くの人、多くの場合、表面のみ澄めるが如く裝ふものあるは嘆はしからずや、教祖も『人の心と云ふものは一寸に判らむものなるぞ』と嘆息し給ひ、尙ほ『水の中なる此の泥、早く出して貰いたい』と人類を代表して切に神に祈願を籠め給、

へり教祖の傳を讀み、教祖の勇猛精進を讃嘆する者は、教祖の、身を以て神に祈請し給へる專念に對しても、絶對無限なる大神の存在を自覺し、心中の泥を除去せんが爲め、潔く神の御前に懺悔を行ひ、身も心も輕く怡々として淨土に入らむことを願はざるべからず、是れ信神を强ゆるに非ず、此の勇猛しき偉大に對する尊崇の念を表示するが爲のみにも、敢てせざるべからず、他の爲めならず我が爲めなり、我が爲めなり、爲さゞるべからず。

優しき教

教祖生れ給ひて幾十年間、慈悲の心、人類濟度の願望抑へ難くして四六時中神祇に祈誓を凝らし給ひたる熱誠は、遂に大神の受け給ふ處となり、神憑に依りて世界を掃清むべきの大命を受け、兼ねて全能を授けられ給ひたり即ち其の行ひ給ふ處、其の宣べ給ふ處、悉く神の御旨に出でざるはなく、一として神の御言葉ならざるはなく、亦一として神の欲し給ふが如く、人類をして安心立命の境に誘導し給はんの慈悲心に出でざるはなかりしなり。左れど唯だ口にて說き聽かせ給ひしのみにてはさらでだに不信の輩多くして、我慢の心に驅られ易き後世の人類に忘れられんことを憂ひ、常に唱へて心に留め瞬時も神の御旨に違はざらしめんが爲め、又異口同音、宇宙萬國をして神の恩澤を蒙らし、人類をして現世の汚濁より救はむと欲し給ひ、手づから筆を執りて、御神樂歌十二下りを書き遺されぬ。此十二下りの御神樂歌は文辭頗る平易して通俗を旨とし、又當時の大和の方言をさへ交へられたりと雖ども、其の中には萬代不易、斷乎として動かすべからざる大神の御旨を宣べ、人倫の大道、罪惡の源、是を救ふの道、並に敬神の儀式に關りたる事迄、僅々の章句の中に述べさせ給ひぬ。文辭通俗平易、僅々に十二下りに過ぎざる章句の中に、偉大なる大神の使命を含ませ、後世迷へる者惱める者をして往く處を知らしめ給ひたる力に至りては實に驚嘆の外なきなり、他に天理教典

ありと雖ども、そは御神樂歌に由りて教理を敷衍したる迄にて、天理教の眞髓は朴直粗野なる僅々章句の中にありて、萬古不磨、易ゆべからず、移すべからざるものにてあるなり。

教祖は基督の如く學なく、釋迦の如き研究はなきも、至誠神に通じ、神詫を受けて窮行實踐萬民を指導し給ひたり、御神樂歌の粗野朴直なるを以てこそ、始めて教祖其の人の至誠を表明し、衒ふことなく、修る處なく、終始一貫、身を以て救濟に當られたる眞面目を見るを得べきなり、而かも斯の御神樂歌に曲を附け、振りを施し、神意をして一層明かに、萬人に知らしめむとせられしが如き、又大神に對する願望憧憬の意をいとも卒直に、聲色動作に現はさむと勉められたるが如きは、刧初以來幾多の宗教家中に於ても見得べからざる深慮の程を知るに足らむ。是れ萬能の大神の御使として、大神の御旨に副ひたる人ならずしては、斯くの如き周密なる、宣傳の方法を案出し得ずと言ふに憚らず。

今日偶々學者輩にして天理教を非難する者なきに非ざるが如きも、天理教の眞の價値は教祖が至誠に於て體現せられたるに於て見るべく、粗朴なる言辭中には、幾多の哲學者、詩人輩の說き、若くは歌ひ得ざる甚深の說法あり、詩歌あり、最大威力者の說話と聞き、命令と服するに聊かの差支えあるを見ず、神は信なり、信ありて神あり、神を信ずるに學問何の力ぞ、學ぶこと多くして、迷ひ益々深きを今の靑年に見ずや。求めよ神は信樂を得せしめ給はむ、叩かざるに門を開く者はあらざるべきなり。

世界を映す鏡

神は何處如何なる處にも、在さぬことなく、其の御眼御心の至らぬ隈なき、絕大して無限き大神なれば、大神は宇宙萬有を映し給ふ大いなる鏡と思ふに差支えなかるべし。大神の御心の鏡は人類のものと違ひ、些しの曇りもなく、淸く澄み給へ

れば、人類其の他萬有の、善きしと、惡しき事何一つとして影の形に添ふが如く、瞬時に映り出でゝ、大神は直に萬有の闇きになせることも、形に現はれず只心に思ひし事にても、悉く知り給はぬものはあらざるなり。『みな世界の胸の中、鏡の如くに映るなり』と敎祖の說き給ひしは、この趣旨を宣ひしに外ならず。又『不思義な助けをするからに、如何なる事も見定める』と云はせられしが加く、神は人類の淺き智惠にては測り知られざる不思義なる助けを人類に施し給ふ、凡そ不思義とは人類の小き頭腦に思ひ及ぼし得ざる事に逢着いたる際に云ふ詞にして、絕大無限の神に於ては、全智全能に在ませば、人類の不思義と思ふ處の偉大なる助けを爲し給ふなり。人力の想像し得られざる不思義の助を施し給ふ神なれば、世界萬有の如何なる事をも見定め給ひて、批判し給ふこと何の不思義もあるべからず。

總て世の人類は新らしき物、珍らしき事實に逢着たる、時は驚きの眼を見張ると同時に、先づ之を賞嘆ふるの言葉を發せざるが常なり、敎祖が神憑に依りて天理大神の御使となるゝや、當時の人々は神の大なる攝理を知らず、已が心靈肉體の救主の天降り給ひしを思はず、從來の宗敎と變りたる天理敎の敎旨に對し、敎祖の熱誠なる行爲に對し、痴と叫び狂と呼び、布敎を妨げ宣傳を迫害したることさへありたりと雖ども、神憑以前の敎祖は只佛敎の信者にして、世を厭ひ人を慨く纖弱き一婦人に過ぎざりしも、其の以後の敎祖は然らず、さらでだに天神地祇を拜するに熱心なりし敎祖は既に大神の血を享け、御命を授かりたる救主に在はしたれば、いかでかゝる誘惑の試に迷ひ給ふべき。神を敬ひ給ふこと益々深く神を信じ給ふこと益々篤く、神の庭に立ちて確乎不拔の意氣もて、世界の救濟に從はれしなり。『人が何事言はふとも、神が見て居る氣を靜め』と實に上に絕大無限の大神あり、何條他人に動さるべき、氣を靜め、心を平かにして泰然自若たらば、神の御心の鏡と人類の良心の珠玉の光りとは、相互に相合致して奇しき光り

を放ち、世界の『悪魔を拂ふて』此世自然の極樂淨土を現出すを得べきなり。極樂淨土は人類の死後に現出ずるにあらず、擧世の人類悉く神を信じ、神の御旨に副ひなば、此世ながらにして甘露臺即ち極樂淨土を現出し、日月圓滿、運氣具足、國土安穩、壽命長久、人は怡々樂々、神の世自から出現でむなり。

人類、假し神を信ずるも、幾千億の人々の中には、眞に神の御旨の全き域に達せず、聊かなりとも良心の珠玉に曇りあらむか、却々に神の國は現出られず、されば心弱きものは忍耐少なく、輝き初めたる良心の珠玉を元の汚れに返へさむとするものなきにあらず、この忍耐の期間は即ち神が人類を極樂に誘ひ給ふに足るべきや否やを試驗し給ふ時期なり、大學を卒業して、學位を得むには、幾年の星霜、幾多の勉强を爲してすら偶々中途にして挫折るものあり、況んや極樂淨土に入り神の甘露の滴りに浴せんには、忍耐、勉勵、精進中々の心懸肝要なり、神は『何でも難義はさせぬぞえ、助け一圖の此心』こて、さまでの難義を與へ給はずと宣はるれと、

誠心誠意一圖に神を信ぜざる者を救ひ給ふことはあらざるなり。されば人類は神の淨土に入らむことを前進の目的とし、唯一の希望とし樂とし、疑と迷より起る悲觀を捨てゝ陽氣ならざるべからず、陽氣は勇氣ある處に起り、勇氣は信ずるに因りて生ず、只至誠一心に神を依賴り、神を信じ、勇ましく、樂しく穢土を後にし、前途の淨土に進軍せざるべからず。御神樂歌の中なる『はやく陽氣になりて來い』こは既ち大神が淨土に導き給ふ、進軍喇叭の嬉しく勇ましき譜なり。絶大無限の神に依りて吹かるゝ進軍喇叭の、嬉しく勇ましき音に。歩調揃えて、淨土へと練り行く天理教信者の、顏面に溢るゝ歡喜は羨ましき限りなるかな。

世界同胞

世界は唯一の神に因りて造られ、神の御裔より、彌や廣がりに廣がりたる人類は、假令眼の色、髮の艶の碧く黑く赤く綠なるも、其の大本は唯一に歸するものなる

ことは云ふ迄もなし。人種、風俗、習慣、種々なる差違はあれど、其の神の御旨は時と處とに應じ、種々なる人類を生ましめ給ひしに外ならず。世界一列悉く血を分け肉を割きたる同胞なりと言ふべし、國體の異なれりとは云へ、風俗違へばとて、已れの欲せざることを他人に施さむとするは不可なり、神は宇宙萬有を司り給ふ、されば數多の國に分れ、人は變ればとて、歸着る處は大神なり。他人に仇せんは結局神に仇するに相當するなり、誰が我が祖先、我れの今日あるを得たる祖先、而かも其の先祖は終始永刧、人類と共に在ましして、大慈悲心を垂れ給ふ有り難き大神なり、其の大神の旨に違ひ、大神に仇せむと思ふ者はなかるべきなり。

神は我一人の神に非ず、宇宙の大神なり、されば御歌樂歌の序歌にも『神が出て何か委細を說くならは、世界一列勇むなり』と決して吾一個の神ならず、世界を救はん爲めの大神なることを明示し給ひ、僅々十二下りの御歌樂歌中に於て、世界一列の爲めに祈誓を凝らし給ふ詞、十五ケ所に及べるを見ても、大神を胸に宿し給

へる敎祖の汎ねく人を愛し、世を救はむと欲せられし勇猛心を窺ひ知るべきなり、されば人は先づ己が心の穢れを去りて神の淨土に入らば、此の歡喜を世界一列の心に及ぼさむことを念じせざるべからず、これ即ち神に報ゐまつるの途にして、神に歸るなり。

自己より父母兄弟に及ぼし、鄕村に、一國に、全國に、世界に、其の神の淨土の歡喜を申し傳へむことは實に、敎祖が『日の本の庄屋敷の、神の舘の地場定め』と宣べさせ給ひし意に、副ふものにして、實に敎祖も庄屋敷を地場即ち立脚場として、漸次敎を弘められむとせられし深慮の程を窺ふに足るべし。

天理敎は一國一鄕の迷信にあらず、原より邪敎に非らず、天地の公道神人合致の大道なり、古今を通じて誤らず、中外に施して戾らざる有難き宗敎なり、信徒は一層信心の念を篤ふすべく、不信者も敎理を玩味して、玆の醍醐味に舌皷せざるべからず、敎に入らんには何等の難澁あることなし、敎祖も『人の心と言ふものは疑

ひ深きものなるぞ』と嘆かせ給ひしが如く良心の珠玉の迷ひの雲を去り『見れば世界の心には、邪慾が交りて有る程に』とある、邪慾の念を拂ひ『村方早く助けたい、なれど心が判らいで』と警告し給ひし御語の如く教理を聞き、以て神の救助に縋らざるべからず、神を信じ、神に賴る『慾の無い者なけれども、神の前には慾はない』の神々しき心となるや必せり、只形式の上に於て神を信ずるが如く裝ひ、教旨の有難さを心讀體達せざるに於ては、何時迄も甘露臺に登るを得ずして、『此所で勤めはして居れど、旨の判りた者はない』と教祖をして嗟嘆せしむるに至る、これ、神に對して大罪を犯すものと言ふべきなり。世界同胞、慈み合ひ、扶け合ひ、神の恩寵に浴せむことは信者の覺悟如何にあるべし、ゆめ忘れても信者たる者は世界同胞の爲め信心の道を怠るべからず。

天啓の聲

教祖は神憑によりて神の御使として、大和の國庄屋敷に宣教の第一指を染め給ひ、神憑、こは曩にも云へるが如く神の世界救濟の大御心と教祖のそれと、相感應し相一致し、無限の力を得給ひし一刹那を云ふものにして、教祖が天啓を受け給ひ天啓に因りて人類を導き給はむとする時期に到達したる時を云ふ、去れば其の後の教祖が宣教の聲は天啓の叫び、即ち神の御聲の取次ぎの御聲なり、直接神の御聲を聞くに等しきなり。一婦人の叫びなりと雖ども其の御聲を筆にしたる御神樂歌は、往古の勇將の叫びよりも峻嚴くして、一絲紊れず、一毛も犯すことを得ず。靈德妙用、言外甚深の哲理を含み、實に千古不磨の叫びと云ふべし、今特に通じ易き天啓の御聲を拔書して左に示さんに神の命令も見做すべきは、

『此處迄隨いて來い』教祖の御跡に隨ひ神の樂土に入れよとなり。

『何れも隨き來るならば謀反の根を斷らふ』信じて隨へ、神に謀反の禍根を斷ち切れとなり。

『病の根を斷らふ』四百四病は名醫之を醫し得べし、神に賴らずしては、心の病根は斷ち難かるべし、病根を斷て自から樂土に入らむとなり。

『一筋心になりて來い』唯信ぜよ、然らば救はれむ。

『人が何事言はうとも、神が見て居る氣を靜め』『二人の心を修めゐよ、何かの事も現はれる』氣を靜めて夫婦和順、良心の修行に怠らざれば神の靈威現はれむ。

『皆見てゐよ側なもの神のする事なす事を』見よ神の攝理の偉大なるを。

『何時も助けを急くからに、早く陽氣になりて來い』人類救濟の願ひ切なれば信心の下に來る勇氣を勵ませよとなり。

『何か萬の助け合ひ、胸の内より思案せよ』『酷い心を打ち忘れ優しき心になりて來い』世界同胞扶け合ひ、自己の良心の叫びを聞き、殘酷心を去り、神の御旨に協ふべき程の心を磨け、さらば『何でも難義はさゝぬぞえ』と命令し宣言し給ひし御聲なり。

『何時も神樂や神樂舞や、末は珍らし助けする』『むしやうやたらに願出る、受取る筋も千筋や』神樂歌を唱ひて神の御旨を心に讀み、神樂舞を舞ひて、神に祈誓を凝らせ、無性矢鱈の願望も數限りなく受納すべしと、是亦た宣言の意をも含む。

『早く普請に取掛かれ』『良き棟梁が有るならば、早く此許へ寄せて置け』『荒き棟梁伴れて行け』早く心を普請して、神の御旨に協ふ樣取掛かれ、心の普請に名手なるは此許なる淨土に寄せ置き、心を荒まする棟梁は伴れ去れよとなり。

『不思義な普請をするならば、伺ひ立てよ』心を普請せんと欲するならば、神の御旨のある處を伺ひ知りての後にせよ、我儘、勝手に普請するも効なかるべし、以上、神の國に入るに必要なる命令を下し給へるものと見るべく、併せて福音を傳へ給へるなり、尙ほ他に引用すべきもの多し。

天啓の聲

神の叱咤とも云ふべきは

『世界一列見晴せど旨の判りた者はない』『村方早く助けたい、なれど心が判らいで』『古今を通じ、中外を見渡せど眞に神の御旨を心に讀み體に行ふ者は無く先づ立脚地なる村方より神の思召を說き、樂土に導かむとするも』『人の心と言ふものは、疑深いもの』にて、眞に神を信ずる者なく、迷信と言ひ邪敎と叫び、神の意に悖る不都合を警め給ふ。

『何程信心するとても心得違はならんぞえ』『心得違は出直しや』『神を信ずるが爲めに、何程の罪惡を犯すも宥さるべしと思はゞ心得違なり、神を信ずるとは形式の上に於てのみに非ず、心の穢れを去りて專心一向ならざるべからず、專心一向なれば心得違ひなかるべき筈なれど、智慮淺き人は不知不識神の意に

反く心得違を爲すことあり、さる時は直に悔ゐ改め、更に良心の珠玉を琢き直して神に賴らざるべからずと宣へるなり。

『此處で勤めをして居れど、旨の判りた者はない』『人の心と言ふものは、一寸に判らぬものなるぞ』『僞の信心は遂に神の眞意を悟るを得ず、人の心は些少の誘惑にも迷はされ易きものぞ、されば自己の心を琢きて、大神の鏡に反應せしめざるべからずとなり。

『邪慾に切りない泥水や』『難義するのも心から、吾が身恨みである程に、邪慾に紊されたる心胸の泥水を除かず、其の我が身の不德不義を怨みずして、神の責罰に逢ひ、救を得ずして只其身の難義を悲む勿れと、叱咤し誘導し給ふ。

『病は辛いものなれど、原を知りたる者はない』『身體の病氣の根原は、醫師或は之を知らむも、心の病の根原は神ならずしては知り得る者なし、神の指示に從ひ心の病源を尋ぬて之を除き以て神域に至るべしと

如上大神の叱咤の御聲の中にも、優しく懇切なる教導指示の温情、溢るゝが如きものあるを見ずや、神の御聲は峻嚴なり、されど此の御聲は秋霜の凛たるにあらずして、紅梅一枝、雪の朝芬香を放つに似たり、近くべし、狎るべからず、去り乍ら寛容にして慈悲深き大神の此の温き御聲をすら『酷い言語を出したるも、早く助けを急ぐから』とて、自ら酷なる詞と爲し給ひたり、酷しき詞を出したるも、瞬時も早く人類をして甘露臺に登らしめむが爲めの催促の御聲と言ひ給へり、酷ならざるを或は酷なるべしとせられ、酷なるも爾等をして安心立命の域に達せしめむが爲めの方便の御言葉なりとし給ふ、大御慈悲の遍ねく深きことは、凡慮の測り知るを得ざる處、人類は迷へり、惱めり、誰か大御胸にかき抱れて、甘露の添乳せんと宣はる、御慈悲に縋り、安住の地を得むと欲せざるものあらざらんや、縋れよ、頼れよ。

安心立命

病める者は醫師に依りて、健康なる身體に復すを得べし。心に病ある者は神に依りて本復するを得べし、懊惱煩悶を覺え初めし者は幸福なり、之れ我が罪惡を覺え初めたる者にして、軈て本復する時あるべければなり、人總べて健全なるか、又は元氣の充てる時は、身に病あり、心に疵あるを覺らず、只管元氣に任せて進み行くが故に我と我が身を顧るの暇なく、從て醫治を乞ひ、神の救を俟たず、斯くして過さむ程に病の根原益々深くして終生の固疾となりて生涯不遇に終らむこと必せり。心の迷ひ煩ひを知り初め、一度跪かんか、病を知らぬ上は兎も角も知り初めての上は、知らぬ以前に增して、惱み益々深かるべきなり。心の懊惱煩悶は、神が最初、樂土に至るの第一門を開きて誘ひ入れられたるものと心得て不可なかるべし、既に惱みあり、煩ひあり、誰によりてか之を癒し之を除かむ、誰に頼りてか心

の重荷を除去せんの願望益々起らむに至るべし、益々思ひ煩ひて益々願望篤からむ、斯くして一歩々々安心立命の淨土に入らむ基にこそは入るなれ。

安心立命は誰に依りて求め得べきか、同じ人類は共に懊惱煩悶せる伴侶なり。決して心の病を癒す名醫にはあらず、惱み煩ひて劇しくなるがまゝに、益々絶大なる、即ち己が伴侶以上なる者に由て、そを除き去らむの念益深く益々強きに至るべし、斯る人は既に神を認めんとせる者なり、四顧茫漠、惱み愈々劇しくして賴るにものなし、心愈々煩ふ、天の一方に天華降り、嘲哢たる樂の音聞ゆ、仰ぐに映ゆき空の象、聞くに嬉しき頻迦の音、この刹那こそ神の實在を信ぜし時なり、映ゆきは神の大御胸の鏡の映え、聞ゆるは信ぜよ縋れの神の天啓、既に神の存在を信じて縋り賴る、天啓の導きに從ひて、良心の珠玉の穢を拂ひ淸め給はんことを念ず、斯の域に達せる人は既に救はれたるの人にして、暑からず、寒からず、惱まず煩はず神を敬ふ心益篤し、敬神の心篤し、從て忠君愛國の念深く人倫の尊ぶべきを知り、

德を修め、業を勵み、禍を拂ふて此世ながらの樂土に生まるゝに至る、大神は人類に啓示して宣はく、生くるも死ぬるもそは、只形體の事に過ぎず、形體は滅ぶるも神を信ぜる者は永久不滅、明晃々たる靈魂を有すれば、靈魂は神と共に何時迄も淨土に在るべし、斯くの如く立命の地を得ば益々大神の御旨を體し、神の示し給ふがまゝの道を踏み外さず、一向專念に本分を盡して怠るべからず、大神は總ての萬有を支配し給ふものなれば、神の命のまゝに進まば、至る處は神なり、即ち神より出でたる人類は、遠く祖先たる神に歸るなり、煩ひ惱める者は幸福なり、神を信じ得べければなり、血氣に任せて心の煩ひ、惱みに氣附かざるものは、一度良心の珠玉を顧みざるべからず、人類よ神より與へられたる靈魂の珠玉は、與へられたる時の如く、依然として光り輝くや、依然として圓く渾かなるや、顧みるべきなり。思ふべきなり。

人の行くべき道

人の行くべき道には種々ありと雖ども、神の示し給へる大道は担かなること疊の上を行くが如く、直なること、尺度の如し、行くべき道に何等の危險何等の迷ひあるべき筈なし、況んや信ずる者には神、教祖を此土に降し給ひて誘導せ給ふに於てをや、神は決して邪悪の道を造り給はざりき、されど邪智淺見なる人類は、我れと好んで邪悪の途を歩むに至りたる所以は、神より授けられたる靈魂の拂拭足らず、曇れる光りを便りて進むが故に、不知不識邪路に迷ひしなり、されば各自の良心に問ひ『心得違は出直し』せざるべからず、懺悔し改めて公道を踏まざるべからず、邪は正に勝たず、悪は遂に沈ぶべき習ひなり。

人類の踏むべき公道は、天理教の教理に凡そ左の種類に於て示さる、即ち忠孝、慈友、和順、信義、仁愛の五是れなり、今之を概説しせんに。

第一　忠孝

忠孝とは敬神の意をも有すること勿論たるべし、如何となれば、神は萬物の主宰者に在はし、神の御裔なる、我が皇室を尊崇し、臣として、赤子として忠勤を励むは、即ち同時に神に盡すに等しければなり、陛下の法律に從ひ、國民として愛國の誠意を盡すは、結局自然の公道に副ひたるものと云ふべし。

父母に孝行する、又神を敬ひ皇室に忠勤を励むに等しかるべし、只大事の前に小事を擲ち只管公道に違はざらむことを勉むべし、是れ第一義なり。

第二　慈友

慈みの義なり、兄弟姉妹等に對する道を云ふ、忠孝の道を知る者は、大本を同ふし最も我に近きものを慈むを否むものあらざるべし、是れ第二義なり。

第三　和順

人倫の第三義にして夫婦相和し、相順へとなり、夫婦の和順を特に説けるは、天理

教の特に他宗教に優れる點にして、教理の基く處とも云ひ得べし、蓋し大神は陰陽の働きにより總てのものを造り給へり、即ち天は陽にして地は陰なり、此の天地を象りて夫婦を造り、此世界を創始せしめ給ひたり。殊に我が日本國は神先づ伊弉諾、伊弉册、陰陽二柱の神を遣はして國の基を拓かせ給ひぬ、日本國民は總て上の二柱の神より出でたるものにして、二尊より出でたる者相賴りて更に數多の夫婦を生めり、夫婦は神の御裔を彌や廣めむ爲めの力の相賴りたるものにして和順せずしては、累を後世に貽すに至るべし。

御神樂歌の序歌第二章には『此世の地と天とを象りて、夫婦をこしらへ來るでな是は此世の創め出し』と教へ、四下り目第二章には『二人の心を脩め居よ、何かの事も現はれる』と夫婦相和し、相順はゞ、神の恩寵自然に篤かるべきを示され、又十一下り目第二章には『夫婦揃ふて獻身的勞働、これが第一物種や』とて現世に於ては夫婦力を協はせて努力するを以て幸福の原緒とはせられたり、夫唱へ、婦和し、一

心同躰苦樂を共にしてこそ始めて、神の樂土を見得べきなり、

第四　信義

朋友に對するの道にして人倫の第四義なり。朋友は君王、父母、夫婦に次ぎ、互に相親み相睦みて村をなし、國を爲すの基にして、相互に信じ合ひ、義理固く、眞面目に交はれよゞなり。

第五　仁愛

神を敬ひ、國家に盡し、一家を脩むるに等しき、誠意を以て、世界の同胞と交はらざるべからず、人種は異るも神の御裔なることは既に述べたり、世界各國、國と國とは勿論、人と人との間に於ては情厚く、愛しみ合ひて、扶け合ふに非ずんば眞の幸福を得べからず、此の旨は御神樂歌の所々に宣はれしに由りても、神の深慮の程を知べし、即ち博愛慈善の心を以て、世界萬國に對せよと述べられしに外ならず、既に天理教は日本國のみの宗教に非ず、世界の億兆は皆神の愛子にして、神は悉

く是等をして神の國に導かむとし給ふなり、大御慈悲の程を知るべし、是れ人倫の第五義とす。

神人和合

人間は夫婦の相互に和合して、樂しき家庭を造り、樂しき家庭を集めて國家を形成るは相互に些の秘密なく、疑惑なく、體こそ殊なれ心は一體に合して離し得べからざるが如く、神とも合體して、心の平和を謀らざるべからず、心の平和を得むには心の穢れを清めざるべからず、心の穢れを清めむには聊かの秘密なく、些少の蟠屈なく、總てを神の御前に打ち明け、心を透明にせざるべからず、其の域に達したる時は神の御胸の鏡は人類の心の珠玉と光輝相映ぜん、此時始めて天啓の聲を聞くを得べきなり『聲の援けはやれ珍らしい』と御神樂歌にあるは、教祖の精進を以てしても、天啓の御聲を聽かれたるは珍らしく、有難しと讃美し給へるも

のにして、其の歡喜の狀言外に溢るゝを覺ふ。天啓の聲を聽くの時は、救濟の恩寵を受けたる時なり『莞爾授け貰ふたら、やれ賴母しや』とは神が教祖の信神を受納ましく て玉顏輝かに、淨土を教祖の御胸に授け給ひし時は、教祖の胸中自から新らしき、血湧き、胸踊りて、賴母しく、心確かになられたるを示すものなり。

そも御神樂勤は、天理教に於て、神人和合の大切なる儀式にして『こん〳〵こんと正月踏み初めのやれ面白や』とある、こん〳〵こんは、舞踏の足拍子なり、斯くの如くに歌ひ、又舞踏るは神の救を得て、心の平和を得たる歡喜を口に讃美し態に現はして、神と共に樂み悅ぶの狀なり。人類歡喜極まれば手の舞ひ、足の踏む處を知らざるに至る、是れ感情流露せる赤裸々の狀態にして些少の汚穢を留めざる人心無垢の時なり、そも神前に歌舞し、音曲して、神と共に樂み悅ぶは我國古來の習慣にして神に對する敬意を表するの時なり、天理教に於ては、形式を此の如く莊重にして古雅なる處にこり、人をして神の領に近かしめんことを計れり、此の神

意の程を知らずして、徒らに痴態と叫び、狂愚と嘲る者なきに非ず、されば教祖も『夜晝どんちやん勤めする、側もやかましうたてかろ』と宣べられしも、此の神人和合の悅樂を知らず、思ひ煩はざるを得ざる者は不幸の極みなり『何時も神樂や、舞踏や、末は珍らし助けする』何時も神人和合の域にありて神樂に、舞踏に眞情の趣くがまゝに神の思愛に浴し、結局讃嘆すべき救濟を享くる者は何等の幸福ぞ、羨むべきなり。

此世の極樂

佛法にて極樂と云ひ、基督教にて天國と云ふも天理教にて甘露臺と云ふも皆委く、神人感通即ち其の主宰者の恩寵を受け、心の穢れ清く澄み、怡樂と歡喜との生活を享くるに至れる者の世界を指せる者なり。佛教にても基督教にても、極樂及び天國は未來世にあるものとし、現世にては到底人間の罪惡の心を清め得ざる

ものとして說かれつゝあり、されど天理教は然らず、天理大神は、甘露臺は現世、眼前に在りと絕叫し給へり、未來の極樂は、人類にとりて餘りに遼遠なり、餘りに待ち遠きなり、現世にありといふ、眼前にありと云ふ、誰か此處に到らむことを願はざるべき此處は『此世の極樂や私も早々參りたい』と教祖は人類の絕叫と、大神の宣言とを併せて、右の如く叫ばれたり、教祖は人類の爲め、甘露臺出現の媒介者として努力せられたるなり。誘導せられたるなり。

斯く極樂は現在界にありと說かれたるは、天理教の他の宗教に優れる特殊の點にして現在に極樂あり、眼前に極樂ありと聞きて誰か、現在の苦痛、惱苦を解脫して其の域に達せざらむことを欲せざるものやある。

されど其の極樂に達せむには元より達すべきの道なかるべからず、高きに達するには階子を昇らざるべからず、不案内の道を行くには嚮導者なかるべからず、階子は心の穢れを清め神の啓示を身に行ふことなり、嚮導者とは温情ある教祖

を指すなり、人類は教祖の案内に從ひ、心の穢を拂ふこと、神の教に副ふ事等の、一段々を踏みて以て極樂に達せざるべからず、

『慾に切りない泥水や、心澄み切れ極樂や』即ち心の穢れを去り、『此處まで隨いて來い』この教祖の嚮導に隨ひ『何時も助けが急くからに』と神の慈悲心に賴り『早く陽氣になり』專心一向何でもこれから一筋に、神にもたれて行かざるべからず極樂に行かむと欲せば『何かの委細を說き聽かし』給ふ處に、耳を傾け、心に銘じて信神せざるべからざるなり。

懺悔

『惡しきを祓ふて助け給へ、天理大神』と序歌第一章にあるは、教祖が人類に代りて第一人類の心の穢を知らしめ、懺悔に因て此の穢を祓はしめ、以て救濟の恩寵を受けしめ給へと、神に念じ給ひし詞にして、恩寵を得むとせば、先づ心の罪惡を認

めて懺悔によりて清めむことを教へ給へるものと云ふべし、心の穢れとは何ぞ、即ち曩に示せる八埃是なり、神は『不思議なる助けをする』程の全智全能の御力を有ち給へば『如何なる事をも見定め』給ふなり、神の御胸の鏡に映らぬものは唯だ一つだになし、神は人類の心の穢れの假令些少なるものなりとも、認め給はぬ筈はなきなり、故に殘酷心を捨て、邪慾心を去らざれば、神は何時迄も、極樂を與へ給はず。

教祖は素と人間界に生れ出でられしものなれど、天啓を得られたる後は、全く神と感通せられし神の寵愛なれども、猶ほ『慾のない者なけれども』と謙遜し給ひ『神の前には慾はない』とて神の御前に救濟を受くる者は、慾なき者に限ると諭し給へり、此の慾の一字は即ち八埃を指し、總ての心の穢を云ふ語なり、慾を去れる者即ち心の穢れを懺悔し、悔改むる者は『何でも難義はさせぬぞ』と慈悲のある處を知らしめ給ふ、而かも他の宗教の如く、極樂に入るの難行苦行を宣はず『無理に如

何爲いと言はぬ』により、『其處は各々の胸次第』『胸の中より思案せよ』とて、神より預けられたる、心の珠玉の穢を顧みむことを敎へ給へり、廣大無邊の敎理、又有難からずや。

病の源

天理大神が病を癒し給ふと云ふを疑ふ勿れ、疑ふ者は神の御德を疑ふ者なり、病の本源を知らざる愚者なり、病ほど人類にとりて苦痛なるを知らざる者はなかるべし、されど其の原因を知りたる者は、殆んど無しと云ふも過言ならず、御神樂歌にも『病は辛らいものなれど、原因を知りたる者はない』『此度までは一列に病の原因を知らなんだ』と、此處の病は、心身の病氣を共に云ふなり、されど其の病源を知りたる者は少し、『此度現はれた病の原因は心から』と病原は心より起ると叫ばせられたり、而して神は難澁を救ひ上ぐれば『病の根を斷らふ』と信仰は病を

癒すと斷言し給ひ、同時に『病む程辛らい事は』なけれど『私もこれから獻身的勞働』とて、神を信じ身を捧げて、道の爲めに盡す者は癒さるべきを示し給ひ、自から敬神の心篤く、神の道の爲に勞働して飽くことを知らざれば、勇氣自然に充滿し、病自から治癒るべき模範を示さんとの覺悟を表明せられたり、『病のすつかり根は拔ける、心は段々勇み來る』境遇に至らむことを欲せざる者やある。

今日の醫學上より云はゞ、疾病の原因は種々あるべしと雖ども、疾病の大部分は精神の隙に乘じて、付け入るなり、精神壯快にして怡樂の中に生活する者は病にかゝること自から少く、假令稀に罹ることあるも治癒速かなり、我が心の明玉曇り、穢るればこそ禍を招き、疾病をも惹き起すなれ、そを覺らずして唯醫藥をのみ賴りとするは、愚かなるの甚しきものなり、草根木皮にも神の御力は籠もるなれば、時にとりての名藥なることは疑ひもなけれど、そは治病の末なり、其の本源は心にあり、されば力めて迷を去り、惑を解き病根を斷たざるべからず、然るを偶々

信者にして、尚ほ此御旨を悟らず、徒らに禁厭をなし、形式に於てのみ、神歌樂勤勇ましきを裝ふものあるを以て、世間の嘲罵を招くこと甚だし、斯くの如きは『此處で勤めをして居れど胸の判りた者はない』と叱咤し給ふに至るなり、斯る僞信者あればこそ、この廣大無邊なる大御教を迷信なり、淫祠なりと嘲らるゝに至るなり、神に對する不德の最上なるものなり、神は醫藥を癈よとは宣はず、病源の大本たる心の穢を第一に除き、僞りの神樂歌勤めを癈して、一心專念に神を信じ賴らば、心の穢れの除かるゝと共に、病氣自から平癒するに至らしめ給ふと云ふなり、僞信者は神の大不敬者なり、未信者よりも猶ほ不敬の甚だしきものなり。

教祖の同情

教祖が神憑以前に於ても慈悲心深くして、人間は云ふ迄もなく、鳥獸にすら情を加へられたるは前にも述べしが如くにして、其の詳細に至りては、卷末に載せある教祖の略傳に就きて、其の一般を知るを可とす、左れどその傳記中に現はれたるものゝ如きは、唯だ形に現はれたる一小部分に過ぎず、如何に大きく、如何に深き同情、慈悲の心を有せられしかは、天理教が夫婦和合の愛情を基として、說かれたるに由ても知るを得べく、天理教々理の基なる、御神樂歌の中には、口之を言ふを得ず、筆之を記す能はざる甚深の慈悲深き御旨の含まれつゝあるなり、今左に其の二三を示さんに、教祖が我等と神との媒介者として神に念ぜらるゝ詞に

『悪しきを祓ふて助け給へ天理大神』

『何でもこれから一筋に神にもたれて行きまする』

『此處まで信神したけれど、源の神とは知らなんだ』

『此度現はれた實の神には相違ない』

『此處は此の世の元の地場珍らし所が現はれた』

『此の度一列に澄み切りましたが、胸の中』

『水の中なる此の泥早く、出して貰いたい』

『今年は肥料置かず十分物を作り獲りやれ、賴母しや有難や』

と以上は、言辭淡々たる中に、神に對する嘆願と、讃美の詞との甚深なる妙味に至りては、全く人間の聲と思はれざる程なるは勿論、神の御使なる教祖なりしなればなり。

人類への訓言と同情の詞としては

『一寸話私のいふ事聞いてくれ、惡しきの事は言はんでな』と、人類を救はむが爲め、教を垂れらるゝにさへ『聞いてくれ』と優しく宣い『惡しきことは言はんでな』と、優しく禁め給ふ、心の穢れを覺らず、徒らに神を罵るものに向ては『其筈や語つて聞かせた事はない、知らぬは無理ではないわいな』聞かずとも知らざるべからざる神の御旨を知らざるを咎めず『無理はない』と憐み給ひ『此度は神が表面へ現はれて、何彼委細を說き聞す』『此源を詳しく聞いた事ならば如何な者

でも戀しなる』と優しく、嚙むで含むる如く諭し、徐かに神の御旨に聞くべく、勸めむとて『聞きたくば尋ね來るなら言ふて聞かす、萬委細の基なるを』とて神の教を聽かむと慾するものには、委細は聽かすべしと宣言し、『此處迄隨いて來い』とて赤子の如く人類を導き『何れも隨き來るならば』『謀反の根を斷らふ』と、身を以て人類に代られ『獲り目が定つた』と人類の爲に靈魂の神の域に達したるを喜ばれ『いつ〳〵迄も土持ちや、未だあるならば私も行こ』と何時迄も人類を救濟の任に當り、共に々々進まんと欲せられ『いつ〳〵までも此の詞話の種となる程に』あるが如く、能く御神樂歌にある處を、深く胸に刻みて忘れず。

後世迄も傳ゆべきことを、宛然、慈母の如く、急かず飽かず、撓まず、屈せず、說き、諭し、教へ、勸め、懲し給ふ大御心の程ぞありがたき。

三歳兒の心

御神樂歌一下り目第三章に『三歳兒心を定め』とあり、是れ神を賴らむとする者は、三歳兒の如く、無邪氣して、玲瓏透徹なれと敎へ給ひしものにして、嬰兒は神の此世に降し給ひて、未だ此の世の穢れに染まぬ、明玉なり、人類は老ゆるは從ひて、益々邪念を深くすといへども、三歳兒の如き、心を以て慈母の乳房に縋りて、生命の汁を求むるが如く、些の邪心なく、神の御胸に縋らむか、素より、慈悲深き大神なり、いかで否みて、生命の多き、甘露臺に昇るを得せしめ給はざらむ、慈母の嬰兒を慈み愛するが如く、神も必ずや愛み惠み給ふは元よりなり。

嬰兒は慈母の乳房に縋らむことを求むるの外何等の慾念もなきものなり、人類も嬰兒の如く神を求むるの外、他の慾念なからむか、求めずとも神は大御手を擴げて、惠みを垂れ給ふべきなり、慈母に縋りて、甘き乳房を含みたる時の如く無上の怡樂と、無上の安心とを得て、宛然、常住の樂園に在るが如き思ひあるべし、之れ神の域即ち甘露臺に達したるものなり。

畢竟人類は、生れたる儘の時代の心に復れ、さらば其の本源なる神と合躰一致すべきなり。

小兒の心となるには、邪慾心を捨つべし

小兒の心となるには、殘酷心を捨つべし

小兒の心となるには、疑念を捨つべし

小兒の心となるには、怨恨の念を捨つべし

此等は直接敎祖の說かれしものにして、御神樂歌の中に示されたる、八埃の意を去るといふも、結局、小兒の心に歸へれと言ふに外ならずと知るべし、小兒の心に復らむは懺悔の外あるべからず、悔ゆべきなり、改むべきなり。

深き思案

敎祖は又、熟慮、即ち眞面目なる思慮の下に、信神の域に達すべきを說かれたり、神

には靈妙なる働きあり、神の御力を賴らむ者には、其の案内者たらんと教祖は、宣べられたれども、決して之を强ゐ能はず、眞面目なる考慮の後、誘惑に克つ覺悟定まらば、隨き來よ、判らぬ處は委細飽くまで、說き聞かさん、腑に落ち入らば先達となりて、迷ひ惱める者を救いて、此の幸福を頒つべしと、人類の深き中心に相談して後に、徐かに信神すべきを敎へ給いたり。

即ち『無理にどうせと言はんでな、其所は各々の胸次第』『無理に出ようと云うでない心定めのつく迄は『無性矢鱈に急き込むな、胸の中より思案せよ』『何か萬の助け合ひ、胸の內より思案せよ』『何れの方も同じこと、思案定めて隨いて來い』『なか〳〵今度は一列に、しつかり思案をせにやならむ』と、思案即ち眞面目なる思慮の必要なる事を斯く迄重ね々々繰返へし給へり。

蓋し敎祖の意、徒らに神を賴るに急にして、神より授けられたる靈魂の穢れを秡ふことを忘り、神の實在を信ずるも、自己の修行に留意ずしては、一度認めたる神

も、誘惑の爲めに其光りを失ひて、認むるを得ざるに至らんことを恐れられしにあるべし、神に救はれたりとは、曩にも詳說せるが如く、自己の心中の明玉と大神の御胸の鏡との光明相一致する時を云ふものなれば、眞面目なる思案を堅固にし、然る後に神に縋るべきが肝要なりと說かれたり。

こは信徒一般に心掛くべき必要あるは、勿論なれど特に敎導職にある者は、此の堅固なる思案を先にすべきこと言を俟たず、敎導職は敎祖の御足跡に習い、大神の大御慈悲を宣傳するが務めなれば、自己の思案堅固ならずしては、神と人類との媒介者として不適任なるべし、而して敎を說くに當りても、常に如上の說を服膺して能く々々信者をして思案を堅めさすべし、强ゐずとも自己の思案堅固なるに至らば、神に賴る者益々多きを加るべきなり。

勇猛心

神を信ずるには勇氣なかるべからず『早く陽氣になつて來い』の陽氣とは、此の勇氣を指すものなり、徒らに狐疑逡巡するは、神の道に到る所以に非ず、既に眞面目なる思案を堅め、自己の心中の穢れを除き、神の道に入らむとするも、此の陽氣即ち勇氣なくしては、誘惑に迷はされ易くして、遂に邪路に陷るに至らん、斯くの如く、特に信神の勇氣を勸め、陽氣ならむことを敎ゆるは、天理敎の佛敎、基督敎等と異なりて、現在に樂土を建設せんとする、優れたる點に一致するものにして、悲觀を斥け、陽氣ならむことを說くは、心身の疾病の此の虛に乘ぜむことを恐るゝが故にして、敎祖の如きも、天啓の聲を聽かれてよりは、一切の悲觀を捨て、歡喜湧くが如き胸の踊りと共に敎に從事せらるゝに至りたるものなり。

一旦陽氣即ち勇猛心を喚び起して、神の國に入り、以て敎濟を得んか、其の後に於ける信者の心は、求めずして陽氣なるを得べきなり『世界一列勇むなり』『世界の心も勇み立ち』『病のすつきり根は拔ける、心はだん〳〵勇み來る』と御神樂歌にあるは、一度勇氣と共に神より救はれたる、後の狀態を言ひ表はせし者にして、陽氣に歌ひ、勇ましく踊るは、神の救を歡喜する形なると同時に、悲觀を去りて常に歡喜と共にあらしめむと欲し給ふ神意に外ならず、勇氣ある世は幸福なり、陽氣なる人間は神と共に在るものなり。

甘露臺の建設

『惡しきを拔ふて助け急き込む、一列澄して甘露臺と』云ふ歌は御神樂歌の序歌にありて、最も名高き章句なり。甘露臺の一句は御神樂歌十二下り中、唯一の詞にして他に全く之を見るを得ず。

甘露臺とは何をか指す詞なるや、信者は甘露臺を建設せむとして、切に神を信じ神を賴ると云ふ、今其の詞の由緣を敎理に依りて究むるに形式に現はれたるものとしては、元と敎祖在世中、現在の天理敎本部境內に、石の臺を設けて、假りに之

に甘露臺と命名け、人々相集まりて御神樂勤めを爲す場所もせられたり、然れどもそは假りに信者の對象として、象りたるものにして、眞の甘露臺は形なければ從て影もなき空のものたるなり、蓋し世界の人類が擧りて、心の穢れを清め、神を便りて救ひ濟を受け、世界一列の心の玉澄み渡りて、全く神の御心と共に玲瓏無垢の世界の狀態を云ふものにして、其處には歡喜と悅樂との充ち滿てるものならざるべからず、語を換へて云へば、世界が極樂淨土に變ぜし時に名づくべき名にして、甘露とは天より降り來る、不老不死の靈水を云ふ、即ち此の靈水に浴しつゝある世界を指すものにして、一切萬有が救濟を得て、神の恩寵と共にある世界に名付くべき名稱なり、即ち甘露臺は

第一、甘露臺は人類が神より、救濟の恩寵を受けて、罪惡、邪念と戰ひ、勝利を得、此世に極樂を實現したる紀念として建設すべきものなり。

第二、我が神の靈妙なる御力を有ち給ひて、世界創造の源の神なる事を表象し且

つ世界の人類悉く集まりて、御神樂勤を爲し得る建築ならざるべからず。

第三、甘露臺は世界一列の心が澄み切りて、神の御心と同じになりたる時ならざるべからず、此事は後神樂歌に一列澄してとあるにても明なり。

第四、甘露臺建設の場所に就きては、御神樂歌に『此所は此世の原の地場珍らし所が現はれた』とある、此原の地場ならざるべからず、此地場に就きて『日の本庄屋敷の勤めの場所は世の原や』と、地場の意味を說明せらる、而して此日の本庄屋敷とは、敎祖が天啓の聲に依りて、初めて敎理を宣傳せられし場所、卽ち大和の國丹波市大字庄屋敷村なる本部の現在地を指せるなり、然れど這は敎祖が誰にも判り易き樣、譬諭を設けて敎へ給へるものにて、其意は此庄屋敷、原の地場とは、人各自の心を指し給へるなり、我が心を淸淨にすれば、源の神の心に通すべし。故に世界一列已が心に甘露臺を建設するの日は、極樂此所に現はるゝなり、故に先づ我が心の改造新築に取り掛るべし、之を敎祖は、御神樂歌の中に『不思議な普請』と說き

給へり、世界一列愈此不思義なる普請に着手すれば、世界中は悉く陽氣になるが、故に、御神樂歌にも「不思議な普請掛れば、やれ賑はしや」と唱えられたるなり。

献身的勞働

『ひのきしん』とは献身的勞働即ち心身を捧げ、骨身を惜まず、甘露臺の建設に勉むることを言ふ、畢竟信仰の努力なり、教理に基き人の爲め、世の爲め根限り、力限り働くことを云ふなり、人は心に怠りを生ずれば、疾病の其隙に乘ずるものなることは、前述したるが如し、之を豫め防がむには、献身的勞働に如くもの無けむ、されば教祖も『病む程辛らい事はない、私も之れからひのきしん』とて、自から卒先して、人の爲め世の爲め、全力を捧げて盡さむことを宣言し給ひ、神憑後の五十年間は勿論、其の以前に於ても心の迷ひ惱みに伴れて、悲觀を起しながらも、絶えず、總てのものに勵み勉め給へり、『夫婦揃ふて、ひのきしん、是が第一もの種や』『慾を忘れて

『ひのきしん是が第一肥料』となる」即ち堅固なる思案によれる信仰と共に、献身的勞働、奮闘的努力の伴はざるべからざるを示し、『何か珍らし土持ちや』とて、献身的勞働は卑しきものにあらずと、勸め、勵まし給ひしにより、神を信じて神の道を歩むもの漸くに多くなれるより『見れば世界がだん〳〵と、希擔ふて、ひのきしん』と救濟せられたるもの〻増ずを喜ばる、必死に勞働する者を見ては『いつ〳〵までも土持ちや』とて、未來永劫勞働の尊ぶべき所以なりと勵まし、『まだあるならば隨いて行こ』と救濟すべきもの〻如何程多きも撓まず救濟せむことを誓ひ、共に努力せむと宣ふ、而して努力足らず、勞働充分ならざるものを見ては『屋敷の土を堀り取りて場所を換える許りや』と信仰足らざるを諷し『無理に止めるや無い程に心あるなら誰なりと』とは、曩に無理に神に來れと強ゐ給はざる旨を、屢々繰り返へされたるに對し、求むる者を無理に止めしむるにはあらず、今は又好みて來る者には、誰なりと來りて、甘露臺建設の爲めに献身的勞働、奮闘的努力を爲せよ、強

いて拒むに非ず、要は堅き思案を定めて後に來れ、來りて働けよと、説かるゝ處反覆叮嚀を極めたりと言ふべし。

扇の喩

教祖は人類を早く極樂淨土に導きて、甘露の滴りに浴せしめ給はむとて、靈妙の御力を遍ねく十方に擴げさせ給ひ、世界萬有委く御胸の鏡に映じ出させ給ひて一々批判、賞罰を定め給ふが故、必ず八穢を去り、一時も早く救濟を享けよと百方諭し、慰め、叱り、懲らし、勸め、勵まし給ひ、自ら卒先して、案内の勞を執らるゝのみか、献身的勞働、奮闘的努力の模範を占示し給ひて、骨を粉にし身を碎き給ひたればこそ、其の誠心誠意に感じて、神の道に入りて救濟を受くる者、漸々に加はり來りしと雖ども、曩に述べたる堅き思案を定めて後に救濟を求むる者少く、心の珠玉の穢れを擲ち、只々神の御胸の鏡の光輝に浴せんとのみ急せる者あるを、見給ひ

ては何程信神したとても、『心得違はならぬぞえ』と、心得違を悔ゐ改めずしては如何程信神するも、其の甲斐なきを誡め、去りながら信神を中止めよと云ふに非ず、其の心得違を悔ゐ改め、『心得違は出直し』更に新に心中の明玉を磨くと同時に、思案の臍を堅めて、『やつぱり信神』すべきを教へ給ひ、信神の効漸く現はれて、今や神の國の第一の門に入りながら、陽氣即ち勇氣足らずして、躊躇ふ者を勵まし給ひては、此處まで信神してからは、『一つの效驗を見にやならぬ』と勢附け給ひ、更に種々の譬喩を用ゐ、例を引きて神の靈驗の著しくして救はれざるべからざる所以を説示し給へり、其一は即ち扇の喩なり。

教祖始めて、神の大道を説き、救濟、恩寵を宣傳へ給ひし時、略傳にもあるが如く、種種なる迫害を蒙むり、遂に官衙の干渉を受け、一時布教を中止するの議出でし時、少數の信徒聯合して、祈禱を行ひしに、神は其の至誠に應じ給ひ、教祖に天啓を垂れ給ひて申さるゝには、爾等が我が教に對する信仰は扇の要にさも似たり、扇に

要あらむ以上は、之を開くを得るが如く、爾等に堅き信仰てふ要さへあらば、救濟の教は期せずして擴布し、驚くべき流布を觀むこ、啓示し給へり、是れ即ち扇の伺ひにして御神樂歌六下り目の末章に『此度見えました、扇の伺ひこれ不思議』と宣べられし事實なり、神は心の要即ち信仰を堅くせよ、末廣がりに彌廣がりて神を讃美し、神の救靈を享けむもの益々多からむと、教徒布教者に教へ給ひし此の扇の喩は、案の如く事實に適中して、現今二千四百數十餘ケ所の布教所を有し、四百三十餘萬の信徒を有せるに至りたるにあらずや、實に事實は動かすべからず、何よりの證明なり、迫害や干渉や、勇猛心の前には、春の朝の淡雪の如く、雲霧消散すべきものなり、心の要めを堅くせよこ、譬喩の巧みなる驚くべきに、非ずや。

教祖は一般信徒に對ひても、神の靈驗に就きて、實の例を示し給へり、御神樂歌五下り目、第二章に『不思議な助けは此所、産屋疱瘡のゆるしだす』こあるは、教祖在世中産屋疱瘡に惱める者に、信神せざるべからざるの理由を說き、眞實の信仰を得

て、神の恩寵に因り、終に癒えたる者ある置例を云ひ給へるにて、疾病こは即ち諸の禍害を總稱して指す語なり、即ち信仰あらば、總ての禍根を斷ち得べしと、譬喩になぞらへ給ひしなり、人は此旨趣に對し、感恩の涙こ共に瞬時も早く『心を澄ましし『即坐に甘露臺の『普請に取り掛る』べく、勞働こ努力こを厭ふべきにはあらず、總て御神樂歌に現はれたる譬喩は、一見不思議の感あるを免れずこ雖ども、深く其の含蓄せられたる、神意に立ち入りて考ふる時は、無量の神慮あるなり、世の淺見者流、深く之を究めずして、表はれたる文辭を見て、珍奇不合理の說と之を斥くるが如きは、恐ろしき辱しめを神に與ふるものこ言ふべきなり。

迫害（一）

何事を爲すに當りても、平坦なる道を行き、穩かなる海に帆を揚げ得るが如く、容易き事のみなりこ思ふは、誤りも甚だしきものなり、險しき山は、前途に横はり、暴

らき風は何時起らむも知れず、神の道に入るにも、神の示し給ふ處、教祖の導き給ふ處に隨はば、必ず神の國に到らむこと勿論なれど、世界は未だ極樂にあらず、甘露臺は建設せられず、神を求め、救靈に與らむとするや、未だ神を求めず、神を欲せざる者は漫りに、嘲笑誹謗を逞うし、又は妬忌してあらゆる妨害を加ふ、是れ免るべからざる順路なり、折角神の國に入らむと欲して、献身的勞働につきたる者も此の妨害に逢ひ、中途に沮むことある時は、遂に神の國に入らずして止むべきを以て、陽氣なれ、勇氣あれ、心の要めを堅くせよと、教へ勵まし給ひしなり、御神樂歌にも『人が何事言はうとも、神が見て居る氣を靜め』と平然自若、他人の誹謗、嘲罵には耳を傾けず『何時も笑はれ誹られて』も信じて迷はざれば『珍らし助け』を神は必ず爲し給ふなり、教祖自身は既に言ふべくもなき大迫害を受け給ひしなり、人は教祖の跡を追はざるべからず。

教祖が天保九年四十一歳にして、天啓の聲によりて、天理を宣べ布き給ひしに、未

だ、世間其の深甚なる教旨を知る者なく、唯徒らに珍とし、奇として、悪罵嘲笑を擅まゝにせり、教祖の一身其の的となり、遂に時の官衙の干渉を受くるに至り、給ひたるも、益々屈せず、撓まず、傳教し給ひしが、教祖の熱誠の加はる毎に、却て嘲笑の火の手を強め、終には本部内なる御神樂勤の場に充てられし、甘露臺の石を堀り拔きて、何處へか持ち去られ給ひし事さへありしなり、是等の侮辱は普通人の耐え忍び得る處に非ず、又四十一歳にして宣傳を初められし時より、明治二十年、九十歳にして昇天に到らるゝ五十年間の長日月間は、奈良縣廳に、又は警察署等に召喚せられて、布教を止めよとの嚴命に接せられし事は、幾度なるを知らざりしも、毅然として立脚場を動き給はざりしかば、遂に拘留、監禁、獄屋に繫がれ給ふこと、僅々十二年の間に實に二十度以上に及ばれぬ、嗚呼、誰か一婦人の身を以て、斯の迫害に堪えしを信じ得るものぞ、神を信じ神に賴る者ならずしては、能はざるなり、教祖はかゝる迫害に堪え、かゝる艱苦を嘗め給へり、他人の蔭に、嘲笑の如き

は決して堪え得ざるの迫害にはあらず、馬耳東風と聞き流すの覺悟位は、教祖の苦行に對して辱かしき程の決心ならずや

迫害（二）

教祖は屢々監獄に繋がれ給ひしこと雖ども、毫も政府を怨むの色すら、表はし給はず、坐臥進退些しも自宅にある時に異ならず、悉く法に協ひ道を違ひ給はず、別に苦痛を感じ給はざるが如く、監視の官吏に對しても、顏色を和げ、殊更に溫言を以て之に接し給へり、信仰なき者ならば、政府を怨むの餘り、官吏に對しても反抗の態度に出で、却て罪を買ひ給ひしやも知るべからざりしも、神の御旨の公道を行くこと篤き信仰を有ち給へる教祖は、斯の苦行も神の命じ給ふ處こ、心の要を堅め未だ心中の明玉の埃全く去らざるものこ自省し給ひ、益々德を積み行を正うし給へり、又當時の神官僧侶の嫉妬に逢ひ、暴行に逢ひ給ひたる事も、幾度なるを知

らず、或は夫にさへ白刃を拔いて、斬られんこし給ひし事さへあり、如斯教祖の御身には危難迫害並び至りて絕ゆる間も無かりしと雖ども、其危難迫害に遭ふ毎に、天を熾く猛火の如く世界を覆す、海嘯の如き勢を以て屈せず撓まず、堀り返へされし、甘露臺の跡にて、盛んに御神樂勤めの響、勇ましく、眞の甘露臺を建てよこ宣べ傳へ給ひしなり、此の信念と此の忍耐なくんば、甘露臺は容易に吾人の眼前に現はれ來らざるなり、されば斯く勇猛精進して、神の御旨を傳ふるに勉め給ひしかば、日を追ふて世間の疑も釋け、追追に信徒の數も增り行きて、官の干涉も自から寬かに、教會の設置も許さるゝに至り、次いで獨立をも認可せらるゝに至り、今日の如く多數の布教者、多數の信徒、多數の教會所を設くるに至り、我が日本國のみならず、外つ國に至る迄、神を讃美し、神と共に喜ぶ神樂歌の音勇ましく、聞くを得るに至りしは、全く神の御使なる教祖が、幾多の迫害に耐え、撓まず屈せず、宣傳に勉められしに由らずんばあらず、人類は教祖の熱誠に對しても、紊りに神を

疑ひ、教を嘲るべからず、陽氣發する所、至誠の動く所、感應せざるの理あらんや、眞實は最良の方便なり、希求なり、教祖の眞摯なる熱誠に對して、神は益々靈德を遍ねく施し給はんとせり、人類は教祖の熱誠に對し、何が故に斯くの如くなり得べきかを稽へ、感恩の志を起すと共に、神に賴らざるべからず、迫害が如何に暴力を逞うするも『皆世界が寄り合ふて、出來立ち來るが之れ不思議』と豫言し給ひしが如く、如何なる事にも妨げられずして『出來立ち來るは不思議』なり、否不思議なるにあらず、凡慮の不思議とする處は、即ち神の絶大無限なるを證據立つるものなり、『日本ばかりや無いほどに國々までも助け行く』と汎ねく世界に布教すべきを示されぬ、既に國體に合致せる我が國に布教するにすら、斯くの如き甚だしき迫害ありたるなり、是を世界一列に布教せんとするに、猶一層の迫害と困難あるべきを豫想せざるべからず、布教者及び信徒は教祖の御垂跡に習ひ、益々心の要を堅めて、幾多の迫害にも困難にも耐え得べきの覺悟なかるべからず、是れ堅く

思案を定めたる者にあらずしては、能はぬ事なり、神の教へ給ふが如く、教祖の模範を示し給ひしが如く、覺悟と決心とを以て、只管神を信じ賴りて在らば、『山の中でもあちこちと天理大神の勤する』ことあるが如く、山の奥、海の岸、炊煙稀なる邊陬の地に至るも、御神樂歌の樂しき響を聞かざる處なきに至り、『日本は豐年や』ことあるが如く、食足り、人和し、夫婦和順、運氣順行、國土安穩、新なる世界即ち甘露臺を現出するに至るべく、『廣い世界を打ち廻り一洗二洗で助け行く』と云ふ教へに從ひて、四海の同胞悉く、一洗二洗、神の御意に清められ、宇宙の隅々に至るまで、地球の圓きが如く、圓滿具足、和平の淨土を現出せしめんが爲め、只管宣傳を心掛けざるべからず。

犧牲

犧牲とは生けるまゝ神の御前に進ずる贄、即ち供物を云ふなり、人類は平素自ら

此の贄即ち犠牲となるの覺悟なかるべからす、されど決して神は、人類に生きながら犠牲たれとは宣はず、決して神はさる殘酷きことを仰せられずと雖ども、只其の覺悟なくしては、神の御國に近くを得ずと宣ひしなり、犠牲と云ふ語を分解して稽ふれば、堅き思案、心の要、即ち信仰を有し陽氣にして、泰然たる形にて神の國に入る象とも解釋するを得べし。

人類犠牲たるの心なくんば、決して神の國に至るを得ずと知るべし、教祖も斯の心有りたればこそ、幾多の迫害、幾多の艱難にも堪え給ひて、飽かず、撓まず、萬有人類の爲に、神の福音を宣傳し給を得しなり、人類も教祖の行ひ給ひたる處に倣ひ、世界人類の幸福の爲めには、犠牲となるの覺悟なかるべからず、總て忠孝を勵むも、夫婦和順なるも、友を慈しむも、仁愛を施すにも、其の對象に對して犠牲となることゝ心得ふれば誤り少からむ、自我の心を去らずしては、神の公道に從ひ、曩に示されたる人道の軌を行く能はず、世界の忠臣、孝子節婦が、名を幾年の後世にまで遺し、後人をして尊崇の念を禁ぜざらしむるものは、悉く犠牲となるの覺悟を有し實際、君の爲め、親の爲め、夫の爲め、贄となりて、神の道を全うしたる人々なり、又犠牲とは、献身的勞働と同じ意味に解するも苦るしからず、古來佛教の釋尊も耶蘇教の基督も皆幾多、献身的勞働を爲したる人々なり、献身的勞働の何事にも必要なる根本義なることは、其の章に於て反覆説示する處ありたれば、今更之を繰返す必要あらざらむも、人類は信徒ならぬも、斯の覺悟を以て世に處せざるべからず、世の迫害艱難は實に豫想以外なり、されど斯くの如く犠牲たるの決心と覺悟あらば、何事か成就せざらむ、殊に信徒たる者は悉く、此の覺悟もて世界人類の幸福の爲めに戰はざるべからず、萬一中途にして斃るゝことなきを保せざれども、そは名譽の戰死にしても、かゝる犠牲こそ、神の喜んで受納し給ふ處となら む、甘露臺は戰勝の紀念碑たること共に、戰死者の紀念碑なることは、甘露臺建設の章に於て説きたるが如し、甘露臺は人類の認めて極樂とし、淨土とする處なれば

犧牲者は即ち萬人の憧憬渇仰の中心となりて、神と共に永劫汀ぶるなき生命を得るものと云ふべきなり。

徒らに神の御名を呼ぶも、此の覺悟なき者は僞信者たるを免れ得ざるべし、何となれば、斯の覺悟出來ざるものは、未だ自我に執着して神の道を身に行い、心に施すを得ざるものなれば、自我とは私慾邪念を云ふ、心の穢れ、心中の明玉の曇り晴れやらぬ事を云ふなり、されば人類は勇ましき神軍の兵卒として、神及び教祖が奏さるゝ、進軍喇叭の音につれて、邪惡と戰ひ神の恩寵を得べきなり、斯の覺悟なきものは邪惡の捕虜として、未來永劫に囚はれの身とならむ、恐れざるべけんや。

教　會（一）

御神樂歌五下り目の末に『どうでも信神するからは、講を結ばちやないかいな』とあり、教祖が說き給ふ神意の程を了解し、堅き思案の下に、信神の覺悟定まりなば講を結ばむと、優しく我等に相談仕掛け給ひしなり、講とは即ち教會を云ふなり、總て人の力は單一にては、甚だ微弱きものなり、一筋の藁は、嬰兒も之を斷ち切るを得れど、綯へる繩は双物にあらずんば斷つを得ざると等しく、信徒各自の單一の力を合せて講を結び、即ち教會を設立し以て世界の幸福の爲めに努力せんは神意の命じ給ふ處なり、即ち教會の設立は、甘露臺の設立を意味す、又教會は神殿を意味すとも考へ得べし、甘露臺は世界萬有總て神の道に入りたる時の、世界を譬へられたるものにして、こは容易に現はれ來らず、それ迄は神の道に入り、恩寵を受けたる者相集まりて神を讃美し、神と共に歡び、邪惡私念を去りたる神聖の殿堂を建設して、信徒相睦び、相樂しむと共に外界者をして如何に、其の殿堂の和氣に充ち、滿ちたるものなるやを思はしむると同時に、一方其の門戸を開きて、求むる者をして歡樂の團欒に入らしむるの神意なり。

此不思議なる殿堂の建設者は、前にも云へるが如く、眞實の信者ならざるべからず、世界萬有の此境に至りたる時は期せずして、甘露臺の建設を見得べし、甘露臺の建設は信徒なる神軍の勇卒ならざるべからず、戰勝の紀念碑は直接工匠の手に成らむも、そを建設せしむべき運命に到達しめたるは、勇敢なる兵卒の力にして、教會は即ちこの勇敢なる兵卒の常住なる兵營なり、總て兵卒には首長たるべきものの必要あり、軍事の謀略を運らし、指揮統一を司るの機關なくんばあらず、されば、天理教軍の首長には管長のあるあり、これ實に天理教軍の大元帥なり、下に教導職に從事せるものは即ち師團長、旅團長、聯隊長、大、中、小隊長にして、天理教本部は、參謀本部に相當し、數多の教會は、各地に散在せる信徒の兵營なり、既に信徒は勇敢なる兵卒なり、軍隊には嚴しき軍律ありて服務の範を定む、されど天理教軍の軍律は、神の同情ある優しき命令規則によりて、編成せられたるものなれば、格縱なる嚴則なし、只夫々上級者の指導に違はざらむことを念とせば足れり、

寛容なる軍律の下に、同情ある教理に從ひて、心身の行動をなす信徒は幸福なるかな。

教會（二）

天理教軍の兵營は、參謀本部とも大本營とも認め得らるゝ本部を除き、全國津々浦々、外國に至る迄、彼處茲處、二千四百數十ヶ所あり、教會所又は布教所と名づく、夫々の隊長たるべき二万千餘名の教導職ありて、所屬隊長の命令の儘に、其地其地の信徒の指導し、各自犧牲的精神を以て、布教傳道に從事し、日に日に信徒の數の益し行くこと、神の啓示の扇の喩の如く、末廣がりに廣がり行き、教會の新設を必要とする地方又少からず、是れ教祖が神詫に從ひ心の要を恣にし給はざりしに由るものにして、信徒各自の心の要さへ確實ならば、一人の信徒によりて神の恩寵に浴したる數人は、更に各々新たなる數人宛の信徒を生むに至らむ、是れ末

晨の喩の眞意なるなり。

素より教會所は信徒の兵營にして、建物を指すと云ふと雖ども、建物必ずしも教會所にあらず、金銀を鏤め珠玉を飾れる殿堂あるも、内に堅實なる信徒あらざれば、そは一種の裝飾物にして、世人の玩具たるに終らむ、かの佛教寺院の如き樓塔門閣甍を列ね軒を並べ、金碧燦爛たるは、教旨の對象として信徒の信仰心を資けむとするにあらむも、職に教導にある者、本を忘れ末に拘泥して、遂に今日の衰退を見るに至れり、かの西都の結構莊重なる寺院が、只古代の美術を玩賞するもの の爲に存するが如きは、即ち近き殿鑑なり、心せでやは。

實に教會所は建物を指して云ふにあらず、同一の信仰を有し、同一の歡喜にあるものゝ集團を指すものとして、不可からむ、結構に現はれたる教會所は、教義宣傳の事務を執るものゝ事務所にして、眞の教會は信徒の堅實なる信仰心の集團なり、假令ば、家と云はゞ、各自の居住する建築物を指すと雖へども、一族一姓と云

はゞ、建築物を離れ、血肉を分けたる近親の團體に相當するが如し、能く玩味すべきなり。

又た教會は場所を異にして、各處にありと雖どもそは、大本營たる本部の便宜の爲め、各地に分設せられたるものにして、神が萬有の大本なるが如く、本部は各教會所、布教所の大本なり、歸する處は一なり、教理によれば、世界一列何れか本部の分設せられざるべき地なからむ、既に教會は本部の分設なれば、各教會に屬せる信徒の一列一體本部に屬するは云ふ迄もなく、各自の信仰心の集團が教會をなし、その集團更に集まりて、一體なる本部に歸着すること、神告の譬の如く、末廣がりに廣がりたる信仰心は、只一の要にいたりて統べられ、纏めらる、即ち神の御心と一致合體するなり、何となれば、眞の信仰に達したる者は、其の大本たる神の御心と同化になるものなればなり、扇に要なからんか、一つ毎にばら〳〵になりて其用をなさゞるが如く、信仰も單獨にては其力薄くして、邪慾私念の魔力に誘惑

せられむの憂あり、されば各自必の要を堅くし、相扶け、相勵み大本の神の御心の要に歸一する樣心掛けざるべからず。

教會（三）

前章に述べたる處を、更に小さく考ふれば、教會は各自の心中に、建設すべきものなりとの教なる事をも諒解し得べし、既に教祖は御神樂歌に於て、建築物なる教會所の新築、及び神殿の普請等に譬へて、教會所は各自の心中に建設すべきものなりと宣べ、給ひたるを以て見れば、教會の建築は心の改造を意味するものにあらずや『屋敷の土を堀り取りて、處を變へる計りやで』とは實に此御旨を表示されたるものなり、蓋し國家の經營成りて、其の富强增進し、國運隆盛に至るは、財力の蓄積、兵備の完成、人口の增殖等、物質の發達にのみ因るにはあらずして、神を敬ひ、君を尊び、人を愛しむ等、精神上の發達に因らずんばあらず、此等精神上の發達は

實に心を改造するより生じ來るなり、人心改造せらるれば、國家自から改造せられて自然神の域に近くべきなり。

教會心中の建設は、暫々繰返へすが如くなるも、天理教軍の戰鬪を聞くに當りて、唯一の堅城鐵壁と依賴するものは、實に斯の心中の教會なり、斯心中の教會堅固ならざれば、外敵の爲めついに敗北するに至るべし、將軍如何に智略に富むも、兵卒個々の持てる楯にして、敵を防ぐに足らざらむか、全軍の敗走は火を睹るよりも明かなり、人類心中の教會は、如何に建設すべきか『不思議な普請するなれど、誰に賴みは掛んでな』即ち他の力を借らず、各自の力を以て自から建設すること自からの自由たるべきを教へられたり、自からを防禦すべき城壁は、自から敵を防禦するに足れりと自信じ得る程、自身の勞作によりて結構思ふがまゝに造り上ぐべきなり、是れ完全なる方法なり、寛容なる命令なり、其詞宛然慈母が愛娘に其の晴衣を見立てしめ、裁縫せしむる時の如き、甘き慈愛の詞なり。

『何か心が澄んだなら、早く普請に取り掛かれ』何時迄見合せゐたるとも、内からするのやない程に『心の思案の地場定め濟みなば、瞬時も早く心中の教會建設に着手せよ、心の改造に着手せよ、何時迄躊躇するも、自然に建設せられ、改造せらるべきにはあらずして、自から手を下して是を爲さゞるべからざる事を教へ給ふ、されど性急は事を成就するの道にあらず、心の改造に當りても、只成効を急ぎ、周到なる注意をなさゞるは失敗の始めなり、大なる意味に放ての教會設立も亦同様なり、各自心の中の教會の地場定め確かにして、始めて大なる教會も成就する譯なれば、御神樂歌にも『むしやう、やたらに急き込むな、胸の内より思案せよ』とある は即ち性急を戒め、地固め確かに土臺堅く、漸次柱を建て梁を置き、屋根を葺き壁を塗りて、完全なる殿堂即ち人類の終極の目的なる、甘露臺を建設せよと教へられしものにして、斯くの如くんば『皆だん〳〵と世界から寄り來た事なら出來て來る』なり、總て物事を成就せんには、順序方法あり、時の緩急あるを、教へ給ふなり

盡せりと云ふべし。

建物の教會には、教會本部の下に大教會、教會、分教會、支教會、宣教所の種類あり、教會本部は教義の根原にして、一般教會の模範たるものとし、本部内には禮拜殿、教祖殿、祖靈殿あり、禮拜殿には主神を、教祖殿には教祖靈を祖靈殿には教師信徒の靈を祀る、又大教會以下の教會所は左の區別に隨ひ設置せらるゝものにして、請願により、之を定めらる。

大教會	信徒一万戸以上
教會	信徒五千戸以上
分教會	信徒二千戸以上
支教會	信徒五百戸以上
宣教所	信徒一百戸以上

迷信

御神樂歌十二下りは、一こして人類に對する神の有難き訓諭ならざるはなく、一こして輕視するを得ざるものゝみなるは、僅々の文字中に無量劫の神意の含まれあるを以て見ても、知るを得べきも、特に注意すべきは、三下り目六章なり、信神するものゝ特に心得べき御訓諭なり、即ち神は全智全能に在まして、如何なる事をも成就し給はざる事なきを以て『むしやうやたらに願ひ出る、受取る筋も千筋や』とあり、人類各々願あり、望あり、各自の神に願出づる處も千差萬別なるべく、神の大御慈悲を有し給へる、この千差萬別の願望を受納し給ひて以て、人類に幸福を得せしめ給ふ、神の恩寵は平等なり、萬人各樣の願望を容れて飽き給ふ處なきなり、さり乍ら、神が如何程寛容に願望を受納し給へばとて、道に外れ理に違ひたるは、決して受納し給はず、勞働ずして、金錢を得むと欲するが如き惡事を成就せ

むとするが如き、神の御旨に悖れる願望に對しては、決して顧りみし給はず、さる非違の願望は、却て神の責罰を招くの基と知れ。されば十二下り目の御神樂歌六章に於て『無理の願はして呉れな』と、殆んど我等に嘆願するが如き情味ある詞を以て、非違の願望は受納し給はざるべきを諭し給へり、然らば非違ならぬ願望とは何ぞ、教典に示す處の五ケ條に對する願望の如きは、神の喜んで受納まします處にして、心だに誠の道に協ひなば、祈らずとても神必ず其の願望を成就し、受納し給はむなり。

偶々教徒中には、此の訓諭を蔑如し、祈りさへせば、願さへせば、如何なる事をも受納し成就せしめ給はむと妄信し、事の善惡正邪を分たず、漫りに祈誓を凝らすものあり、これ迷へる信者なり、眞に神の救濟を受け得べき資格ある者にあらず、未だ心の珠玉の曇りを磨かざるものなり、既に信神の第一義たる心の珠玉の穢を去らずして、漫りに神に賴る、されば、こそ、無理なる願、非違なる望を以て、神に受納

を迫るなり、既に第一義に於て神の道に違へり、假令善良にして神の道に從へる願望なりとも、いかで神の受納し給はむ理由やあるそを悟らずして此の擧に出づる者を迷信者と名づく、斯かる輩あればこそ、嘲罵、誹謗を免かるゝ能はず、教祖は決して非違なる願望を神に祈り給はざりき、献身的勞働の下に勇猛心を喚起し、只々人類の救濟を祈り給へり、迷信者の願望は神を煩はすのみか、却て神を傷くる罪の大なるものなり。

心の田地

教祖は釋迦の如く甚深の教育を受け給はず、基督の如く前代の書を研究し給はざりし、されば其の書き遺されたる御神樂歌の如きも地方の訛を其の儘に用ゐ、平易通俗の語を用ゐ給ひき、是れ神慮のある所にして、宗教は學者にのみ必要に非ず、世界萬有、眼に文字あるもの、無き者を問はず、智識の淺き深きを論ぜず、遍ねく一切に行き渡らしめんと、特に簡單なる語を用ゐ、通俗の譬喩を引用せられたり、甘露臺、扇の伺、不思義な普請、神殿、大工棟梁の譬喩等、何人の耳にも心にも入り易く、解り易きを以てせられ、其意味に於ても又然り、茲に陳ぶる心の田地の譬喩等の如きも、其中の一にして、信仰の必要なることを譬へにて説明し給へるなり。

人類が日常生活を繋ぐ便りとして、食物に供せらるゝものは米なり、此の大切なる米の成熟る處は田地なり、即ち田地は人間の肉體を形成る本源と云ふを得べく、此の田地より生ずる米の收獲豐かならむことを願ふものは、良き田地即ち地味肥えたる處を求めざる者はあらず、『良き地があらば一列に、誰も欲しいであらうがな』と宣ひしが如く、誰しも美田を得ん事を望まざるものはあらず、人間肉體の、生命、原動力は良田にあるべく、精、神上の生命、原動力は心に其の本源の田地を置かざるべからず、安心立命の安樂境に至るべき原動力は、心の美き田地に賴らざるべからず、精神上の生命は、其の本源なる心の田地より收獲する處の恩寵を

以て繋がさるべからず、誰しも米の收獲豐かなるを欲するが如く、無上の安樂を得むことは萬人の欲する處なり、美き心の田地とは、穢れ即ち邪心、罪惡の雜草を刈り取りたる處ならざるべからず、『いづれの方も同じこと、私もあの地を求めたい』と教祖自身、修行の積ませられたる身にてありながら、此の話をなし、美き心田を得むことを推奬し給へり、『何でも田地が欲しいから、價は何程いるとても』、美き田地を得て收獲の豐かならむことを望むものは、其の購入に際して、高價を惜むべからず、よし其價高くとも、收獲多ければ其の價を償ふに足ればなり、心の田地を拓き耕し、其の收獲を爲す者は價高くとも、辛苦艱難を厭ふべきにあらず、幾多の辛苦艱難の高き價を拂ひたるだけ、必ずや神の恩寵の一層篤きものあるは疑を入れず、美き田を望み乍ら、價の高きを厭ふは、安心立命の極樂境を希ひ乍ら、其處に到る道を歩行く其の勞苦を忍び得ざる懶惰者なり。

『屋敷は神の田地ちやで、播いたる種子は皆生える』屋敷は人類の心なり、心即ち神

の田地なり、人類の心の田地は神の田地と一致合體するなり、されば人類の心の田地さへ美ければ、神の大御心の田地と一致になり、播かれたる種子の生えざるをなし、種子とは宗教心を云ふなり、語を換へて云へば神の救濟を欲する願望なり、既に價の高きを厭はず、献身的勞働をなして、心の田地の開墾をなす、種子の生え育ちて收獲の多からざらん理由あるべからず、種子の肥料は信仰なり、既に救濟を欲するの願望起りて、信仰の肥料にて培養ふ、精神の原動力なる米、即ち恩寵の收獲豐かなるは疑ふべからず、教祖の『私もしつかり種をまこ』と云はれしは、自己の心田に救濟を願ふの種子を根ざし固く播くべしと、人類に卒先して模範を示し、以て恩寵を受けしめんと欲し給ひしに因るなり、『此度一列に、ようこそ種を播きに來た』こて、救濟を欲する者の多くなり行くを推奬し、『種を播いたるそのかたは、肥料を置かずに作り取り』、既に救濟を願望するに至り、高き價を心の田地に拂ひ終りたり、特殊の肥料を要せずして、只信仰のまに〳〵其の種は生育して『實

に日本は豐年や『求めずして、收獲益々多くなり行くべしとて、田地に譬へて恩寵を受くるの途を示し給ひたるもの、例甚だ卑近にして、田婦野郎の耳に入り心に留め易きを擇ばせ給ひたる深慮こそ有難き極みなれ。

地場定め

御神樂歌十一下り目第一章に『日の本庄屋敷の神殿の地場定め』とあるは、教祖が神殿の造營になぞらへて、教え給へるものにして、日の本庄屋敷とは、大和國丹波市なる教會本部の地名を假りて、神殿造營即ち甘露臺の建設は爾等の心中にありぞと諭し給へる處、神殿を建築せん者は先づ地固めを爲して根底を確めざるべからず、甘露臺を建設するには、先づ地固めとして、心の根底、即ち信仰の根ざしを、固めざるべからざるを教へられたるなり。甘露臺建設の如何に幸福なるかは既に再三述べたる處にして、神殿の建築出來たる時とは、神が宿り給ひ得る樣、即

ち神人一致合體し得る樣、心の穢を去り、恩寵に浴するを得るに至りたる時を云ふものにして、地場定めとは心の穢を去り、邪念惡慾を除きて、我が心の明玉を磨き智德の光輝を發せしめ、神の宿り給ふに適する樣、清淨なる領域となすことを云ふなり。

心の地固め既に成らば、神殿の其處に建築せられむとするは、決して難事にあらず『山の中へも入り込むで、石も立樹も見て置か』れたるなり、地固めさへ出來終らば、決して用材等の有無を心配するに及ばず、心既に清朗透徹ほらば神の恩寵既に降り『早く普請に取り掛』るを得べし、自己既に恩寵の歡喜に醉ふ、誰か其の歡喜を隣人、近親に頒たんことを欲せざるものぞ。斯くて『廣い世界や國中の石や立木は』悉く神殿造營、甘露臺造設の獻身的勞働者に依て、其の用途に從ひ、結構なる宮殿の造營を見るに至るべきなり『此の木切らうか、彼の石も』と決して配慮するに及ばず『神の旨次第』なり、萬能の神は甘露臺建設に要する用石材木を決して此等

に配慮せしむることをし給はず、只地固めせよ、心の穢れを去れと宣へり。

凡そ天理教徒たる者は神の此の御旨を體して、心の地固めを行ひ、教祖の導き給へる處に從ひ、信仰の心を鞏固くして、之を追々に他人に及ぼし、全國に及ぼし、世界に普及して、四海同胞の實を擧げんこと、尙ほ堅固したる地盤の上に、巍然たる一大神殿を建築するが如くならざるべからず、その建築は地震に耐え、火事に焚けず、永久不變、幾萬億年の後迄も腐朽に耐ゆるものならずんばあらず、教徒の責任も大なるかな。

意義ある勞働

勞働は神聖なり、勞働に貴賤上下の差別なし、一國の政治に與る總理大臣も、額に汗して勵しむ車力も、其の務めたる點に於ては、何等の變りあるべからず。職務を粗末にする國務大臣よりも、忠實なる車力なる方、却て神の旨に協ふものなり、何

が珍らし土持ちや富者の萬燈、貧の一燈なり、富裕者の千百金を神殿の造營に寄進するよりも、汗と共に肴を擔ひて土持ちをする貧者の方、遙かに神の御旨に協ふものなり、神の前には一切平等無差別なり、執れる職務の何たるを問はず、能く務むる者最も善き者なり、土持として、何の卑下するを要せんや、心誠の道に協て肴を荷ひ土を運ぶ、誠に意義深き勞働なり、心の地場固めには是非共土持ちを爲さゞるべからず、『未だあるからは私も行こ』と教祖は自身にも斯の土持を助けむと卒先し給へり、人は其の跡に隨ふて務めざるべからず、神殿造營の爲め土持ちを厭はざるものは、極樂に至る道中の務めを厭はざる者にして、神の前に於て勇者として賞讃せらるゝ者なり、勞働の賤しからざるを知り、献身的努力をなして飽かざらば、何ぞ貧しきを憂へむや、神は常住人類と共に在まして至らぬ隈もなし、かゝる入類をこそ直に極樂に導き給ふなれ、曩にも云へるが如く、極樂は此世にあり、何時にても到るを得べし、家富み國榮え、君臣、父子、夫婦、兄弟、一國一鄕相和し

相信じ、苦を知らず悲を覺えず、絶えず、神の恩寵を得むには、骨を粉にし、肉を碎きて勉め勵むの決心なかるべからず、是れ神の命じ給ひし處にして、人の爲めにするにあらず、吾が爲めにするなり、否むべけんや、今や『世界がだん〳〵と春擔ふ』て教祖の跡に隨ふの時節なり、何條後る可けんや、一列一體勞働の意義あるを自覺し、相携へて春を荷ふを辭せずむば、甘露臺の地固め益々速かならむ。

大工の伺

甘露臺の造營につきて、如何なる設計をなさば宜しかるべきと、教祖神に神詫を伺はれしに、神明らかに御示しありたることは、御神樂歌の中に『大工の伺に、何かの事も任せ置く』とあるを以て知るべし、各自の心の地場は固まりたりと雖ども、未だ一列一體に斯くの如くなりたるにはあらず、既に地場固め出來たる者は神の命じ給ふがまゝに、各自の心に神殿を造りて神を宿し奉り、斯かる人々の集まりたる地方には、教會ありて神此處に在せど、然らざる人々に對し、地方に對し、神殿建築の大工なかるべからず、是れ教徒及ひ教會所の結成に就きての指導者たる教導職を云ふものにして、神は此の指導を大工即ち教導職に任せよと命じ給ひしなり、故を以て信徒は先づ心の地場固めの方法、神殿建築の設計等一切大工たる教導職に聞き、神の御旨に違ふことなき樣の建築方法を執らざるべからず、如何にせば地震にも火事にも耐え、清淨にして潔白なる神の宮居の宮柱、太しくおし建て得べきか、別に難かしき方法あるにあらざることは曩に細說せり。而して又大工たる教導職は、神より『任せ置く』この重任を授けられたるからには、其の責任の蔑にすべからざるを稽へ、細心翼々、悉く神意に因りて執行はざるべからず、『不思義な普請をするならば、伺ひ立てゝ云ひ付けよ』とは教導に對する金科玉條の命令なり、私意を挾み、我見を加へて人に臨むべからず、神の御旨は廣大無邊にして凡慮の究め得る處にあらず、謹むべし。尙又一方に於て神の恩寵の有

難きに浴し、其の歡喜を他人に頒たん爲め、他の信徒、教會所の指導者たらむと欲する者もあるべきが、其等の人々にして、適任なりと思ふものあらば『皆世界からだん〳〵と、來る大工に匂ひ掛け』即ち預め之を選び定めて、其の聖職に就く準備を爲さしめ置くべしとなり『良き棟梁があるならば、早く此方へ寄せて置き』其任に耐ゆべきや否やをも見窮めざるべからず、希望者は又神、意に從ひ、吾と我が心の地場固めの確乎不動るものなるや否やを調べ、充分心の明玉を磨きて神意を俟たざるべからず、教職に入らむとする者は勿論常住神をして自已の心の神殿に宿らしまつり居るものならざるべからず、かゝる準備あらば神は必ず、其の心に宿り給はむ。此條下を讀む者は更に、自已心中の明玉に照らして熟考する處あるべきを要す。

四名の棟梁

棟梁は數多の大工を指揮監督すべき務めを執るべきものを云ふ、故を以て最も腕前衆に優れ、統率の才能ある者にあらざれば能はず、神意に依りて集められ、養はれたる數多の大工の中、何人が最も此の任に適まるか『何れ棟梁は四人要る、早く伺ひ立てゝ見よ』と宣ひぬ。その四人の棟梁とは如何なる者を適任とせらるゝかと云ふに、教祖が御神樂歌中に示し給へる詞を以て窺ひ知るを得べきなり即ち十二下り目、八章に『山の中へと行くならば、荒き棟梁連れて行け』と先づ神殿造營の爲め、用材を斫り出し木積りをなさしめん爲めには最も荒き仕事に慣れ、大躰に通じたる勇氣ある者ならずんばあるべからず次に同じく第九章には『これは小細工棟梁、建前棟梁、これ鉋』とありて、用材は既に荒き棟梁によりて、大躰の見積りをなされ、斫り出されたるからには、次は建前棟梁の手に引き續がれ、夫れ〳〵々の木取りをなし、柱を建て梁を欽め、棟を上げ神殿の形體を造る、これ鉋とは之に使用する道具の名稱を示して其の役柄を教へ給ひしものにして、小細工棟梁

とは神殿の造作裝飾を施す細工棟梁を指すなり、夫れ〴〵の技能に應じ造營の仕事を分擔せる者三人に及びたれど、四名の棟梁中、尙一名は如何なる仕事を分擔すべきや、御神樂歌中には明示せられずと雖ども、是れ棟梁中の棟梁にして總棟梁とも名づくべきものなり、此棟梁の仕事は直に神の命に聞き、全體の設計を爲し、他の三人の棟梁に其の技能に應ずる仕事を見極めて之を分擔せしめ、多數の大工をして其の部下に配屬せしむる等の總指揮、總監督者なり、最も總てに通じ究め、總てに寛容なる度量を有すべきものなり、是れ即ち管長を指すものか。

造營落成

神殿及び教會建築の事が、教を宣べ給ふ上の方便として、無學文盲なる者にも通じ易き樣、物に譬へられたるは勿論にして、大工棟梁等の事も亦同樣なり。

人の性質は同じからず、或は天性勇氣ありて、氣力旺盛なるものあり、これ等の人

を用ゐなば、信仰熾くが如く烈しく、艱難を憚らず、危險を恐れず、勇往邁進んで信徒を奬勵し、教の敵を摧き破りて、教を拓き業を創むるに適當なるものあり、是れ實に荒き棟梁なり、尙ほ又器量宏く深く、思慮周密なる人あり、かゝる人を教を宣ぶるに用ゐむか、堅き信仰と明に敏き智識を以て、信徒を訓練し、教務を整理して教會の庶務を任かすに足るの人なり、是れ建前棟梁なり。或は又一事に長じ、一藝に達したる人あり、この人を用ゐむか、種々の方面に於て、一事一業に必要なる働きを爲すべし、是れ小細工棟梁なり。何れも三稱三種、性質に於ては異なれど、かゝる人物を選びて、聖職を授けむか、各自其の器量に從ひ夫々命ぜられたる務めを完全に果し得べきなり、而して尙ほ一人の總棟梁たるや氣宇最も廣大にして寛容、頭腦明徹にして信仰の點に於て間然せざるの人ならざるべからず、是等三人の特長を統べ備へたる人ならざるべからず、斯くの如き、總棟梁を戴き、各特長ある棟梁其の指揮監督を受け、其の下に忠實なる多數の大工ありて、茲に始めて完

全なる神殿建設の準備は出來上りぬ『此度一列に大工の人も揃ひ來た』と讃美し給へる域に達せるなり、斯くして神殿は完全に建設せらるべし、既に各自の心の地場固め濟み、神殿建設の棟梁大工いざや手腕のありたけを振はむものと待ち構へたり、いかで神の恩寵此處に降らざらむや、今や天理の數は汎ねく一切に行き亘りて、至る處に夫々の棟梁大工ありて信徒の數も增し行くこと頗る盛むなり、教祖が御神樂歌十二下りに於て大工棟梁に譬へて教導職にある者の事を繰返へし說き示されたるは、教導者に人物なくして、天理の教の遍く一切に行き亘らざらむことを恐れ給ひしものにして、畢竟神の恩寵を遍く一切に行き亘らしめむとて特に此點に心を注がれたるものなり、教祖常に教を弘むるは左迄に困難ならざるも、教を弘むるに足る教導職を得る事は頗る困難なりと宣ひ、數十年間專ら弟子の養成に心を用ゐ、教を聞くに便り多からしめむと心を傾けさせられしとぞ。

教導職の務

教導職とは教會所を監督し、又教祖に代りて布教を爲す職務なれば、自の信仰は最も固き人ならざるべからず、心に穢れあり神を信ずる事能はずして、表面のみ殊勝らしく口に神の靈德を讃へ教へを說くとも、神は眞の力を貸し給はざるが故に、其教えを聽く者之を信ずべき理なし、然れば教導職となりて布教を爲さんとする者は、先づ第一に自分の信仰心を固めたる後、我れは教祖なり、神の御使なりとの確信を以て、如何なる迫害をも恐れず、艱難に耐え世界一列に救濟の恩寵を得させんが爲めには、身を粉にし犧牲になる覺悟を持つべし、然らば天啓の聲が教祖の耳に聞こえしと同じく、斯る布教者の耳にも聞こえ、口にも傳はりて信徒をして、神の靈德に感ぜしむること容易なるべし。

教導の職に居る者は教えを說くに當り、自ら神の威嚴を以て教徒を導き、罪惡を

斃すの勇氣を必要とす、而して我が神は博愛慈善を好み給ふ神なれば、教導の職に在る者も罪惡と鬪ひ、迫害を切り拔けて教えを弘むるが爲めには鬼をもひしぐ將軍の勇氣を保ち、人を導くには極めて温和しく、決して强ゆるが如き事あるべからず、又世界一列皆同胞なれば、其心して交り唯靜に我が教理を說き、決して他を罵り、又嫌惡が如き口吻あるべからず、然るに布教者中僻める心を持ちて自ら他の宗教に妨害せられて苦められ乍ら、自らも他の宗教を惡し樣に罵る者あり、愼むべき事なり、他の宗教にても、唯教理を異にせるのみにて、人類の濟度を目的とするに到りては變りあることなし、他の欠點を擧げて非難し、强ゐて信徒を自分の方に引き附くる如きは却りて神の眞意に背くべし、我が宗教の良きを悟らば只能く神の靈妙なる御力を有し給ふことを宣傳すべし、人々の其言により心を定め、慕ひ來るに任せよ、他を誹難ずるは我が宗教を罵ると同じ、愼みて教理を究め偏見を去りて弘く世界に布教すべきなり。

教徒の階級

教徒とは我等一般に天理教を信ずる者の總稱なり、唯一圖に神に賴依るべし、さらば必ず、救濟の恩寵を受くべきなり、神の前には世界一列凡べて上下の階級なく、皆同等なり、されど教會員としては上下の階級あり、之れ教導の職に在る人は、神の御旨を受け教祖に代りて我等を導く權威を有するものなれば、陛下の臣民としては同一の權利を有するも、國家の政事を行ふ上に於ては官の命に隨ひ、戰時兵卒が將軍の命令を遵守が如く、一意教導職の導くに任せ、教導職は又其上級に在る人の命に隨はざるべからず、今天理教々規に依れば、此教導職の階級を十四に定めらる即ち左の如し

一級　大教正　　二級　權大教正
三級　中教正　　四級　權中教正

五級　少教正　六級　權少教正
七級　大講義　八級　權大講義
九級　中講義　十級　權中講義
十一級　少講義　十二級　權少講義
十三級　訓導　十四級　權訓導

以上を總稱して教師と云ひ宣教、祭典、葬儀、祈禱、禁厭を執行職務なり、而して管長は當然大教正たるものにして、教祖の血統に在る人代々其跡を襲ぐものとす、現管長中山新次郎氏は即ち教祖の孫に當れり、教師は皆管長により命免せらるゝものなり。

禮拜

人は神に對して救濟の恩寵を垂れ給はん事を乞ひ、又神恩を感謝する爲めに、朝

夕禮拜を怠るべからず、禮拜には一定の儀式典禮ありて、天理教にては遠く神代より傳はる所の式に倣ひて、御神樂勤を行ふを一の儀式と爲せり、之れ神恩に感じて欣喜抃舞し神人和諧の狀を表はせるものとす、然れど唯濫に御神樂勤をなして打ち騷ぐとも、内に誠眞の心なければ神は決して此禮を受け給はず、願ひを聽き給はざるべし、天理の大神は無理なる祈願即ち道德に悖戻せる信仰、誠なき儀式の如きは好み給はざればなり。

心なき禮拜は虛禮とて我等人類の間にありても彈指せらるゝものなれば、神に對してこれより無禮なるはなし、されば神前の禮拜は心を主とすべし、禮拜に誠意なきものは世間に對しても僞り多き人なり、斯る人は、救濟の恩寵を受くる能はず、故に教祖も『なんぼ信神したとても、心得違はならんぞえ』此所で勤めをして居れど旨のわかりた者はない』と固く誡め給へり。

次は祈禱を以て儀式となす、精神に到りては御神樂歌に盡せり、何れにしても信

徒たる者禮拜の精神を忘るべからず、誠眞の心を第一とし尚左の祝詞を朝夕神前に奉るべし。

朝夕神拜祝詞

掛巻畏天理大神乃御前爾恐恐白左久大神乃廣厚大御恩乎嬉毘奉利辱奉利て朝奈夕奈爾拜仕閉奉良久乎諾給て現御神止大八洲國知食須天皇乃大朝廷乎天壤乃共無窮爾守幸給皇國安穩爾又吾我教乃教師信徒乎始米て天下乃人民乃家乎身平介久安介久守幸閉給吾我教乎彌廣爾彌遠爾布支弘恭良志米給閉止恐恐美美母請祈奉良久止白須

尚ほ信徒は本部に於て定められたる、三箇條の參拜心得を守りて忘るべからず、

此三箇條は御神樂歌及び教典中の參拜に就きての精神を殘なく現はしたるものなり。

信徒參拜心得

一、參拜の時は容儀を正し擧動を愼み至誠を以て先つ神恩を謝し奉るべし

一、所願の意を陳ぶるには必ず先づ寶祚の長久國家の安穩を祈り奉り一身一家の幸福を祈るべし

一、一身一家の幸福を祈るにも無理なる願ひをせぬやう心掛け已が本分を盡して安心の地を得むことを期すべし

右三箇條の旨意可相守もの也

之を一層解り易く説明すれば、神を參拜する時には自分の容儀、即ちなりかたちを正しくし立居振舞は粗忽なき樣慎み眞心を込め、第一番に神より御恩を受けし御禮を述べ、神に御願の向きありて其心を申陳ぶるには、先以て我が　皇室の御血統の幾億万年の後までも永久に續きて變りなき樣、又我が國家の　皇室と共に穩に治まり、行く樣にと心を籠めて祈禱し、それより自分の身、自分の一家の幸福を祈れよ、自分の一身一家の幸福を祈る時にも無理なる願ひをせぬ樣に心掛け、教祖の御教えの心を守りて自分の盡すべき道を盡して心の穢れを捨て、神の救濟の恩寵を受け安心立命の授けを得る樣にせよとなり。

教典（一）

天理教の教理は御神樂歌十二下りの中に説き盡され其内には神を敬ふべき譯、皇室を尊ぶべき事、國家に忠勤を盡すべき事德義を重ずべき事等をも含み居れ

るを以て何人も心靜に之を口に唱へ、其旨を探らば、直に教祖の口より教えを聽くが如く、天啓の聲を聽く心持すべし、而して教祖は初め唯直接、弟子信者等に神の道を授け給ひしものなるが、後に誰にも容易く解り又記憶易き樣にと種々なる譬喩を以て、七十歳の時に御神樂歌を書き遺し給へり、此外に教祖自ら書き遺されし者なく、此外に何等の教理とてなければ、御神樂歌は即ち教典と云ふを得べし、然るに教祖より直接に教を聽くを得ざりし者及び教祖の歸幽の後は、却りて此簡單語を用ゐ、譬喩を用ゐ給へるを解し得ぬ者多く、又土地の方言等も雜りて形式整ひ居らざりしを以て、管長には教祖の弟子なりし人々と相談の上、御神樂歌の意を取り、又教祖在世中の教えの言葉を本源として正しき文章を用ゐ、天理教々典なるものを作られたり、其意味は悉く御神樂歌の中に含まれあり、又天理教は文字の教えに非ず精、神の教えなれば、其教理をさへ知らば、別に形美しき教典の必要なけれど、後世に傳ふるが爲めには神意を窺ふ門戸として必要なる

ものなるを以て我等も亦御神樂歌を暗誦して教理を悟ると共に教典をも讀誦て一層神意の在る所、教祖の御旨の基く所を知らざるべからざるなり。

教典(二)

此書物の全部は、教徒及び世間一般に天理教の教理を容易知らせん目的のものなれば、今迄書き列ねたる所にて、最早御神樂歌の意味も教典の意味も其概略を說き盡せるが尙教典の如何なるものなるかを大體に說明すれば

初めに神の御靈德を讃へ、教祖の宣教に依りて、我等も神の恩寵に接するを得たれども、其旨の廣くして自分等は未だ其一端をも知り得ず、天理の深慮を知り盡さず、御靈德を全くするを得ざれど、宗教は由來筆墨の教に非ず、教祖の說かれしは至誠を以て道を求むるを第一の要諦とするものにして、御神樂歌十二下りの外書き遺されしものあることなし、然るに此儘にては教祖の既に歸幽れし今日

其教旨を顯彰するものなくば、船に針盤なく、港に燈臺なきが如く、邪路に迷ひ入る者を生ずるべしとて、教典を編たる理由、教典の內容を大體に說明し、次に敬神章、尊皇章、愛國章、明倫章、修德章、秡除章、立教章、神恩章、神樂章、安心章の十章に別かちて神を敬ふべき所以を敎え、忠君愛國を基礎として、教理を示せるものにて秩序整然たるものなり、然れど古典を摸範として書かれしものなれば、或は字句の讀み方に困難を覺ゆる人あるべし、故に本書卷末に管長中山氏の筆になれる天理教々典讀み方を載せあれば、就いて見るべし。

天理教の獨立

天理教は小序にもあるが如く、教祖布教の初めより救濟を目的とするものなれば、神道とは全く趣を異にし、事實上獨立し居りしと雖も、我が國の法律の上より明治四十一年十一月までは、神道の管轄に屬し、又從來世間の誤解を招き居りて

ありとあらゆる妨害を受け、政府の干渉を受けし事さへ度々ありて、表面上獨立を許るされざりしが、追々に世間の誤解も釋け、信徒も亦著るしく增加して我が國の風教上何等の害なきのみならず、國體に合致し、國民の精神を導くに就きて大に効ある事を認められ、同年十一月二十七日遂に獨立を認可せられたり、而して教規に依れば本教の教旨は天理教々典に依るとあり、故に信徒は常に此教典の主旨に背かざる樣注意すべし、然らざれば漸く獨立せるものも再び認可を取り消さるゝに至るべし、教導の職に在る者も能く教典の本旨を守りて其義務を盡すべし、若し之れに背くが如き事あらば、教規に依り罰せらるゝのみならず、官の處分をも受くるに至るべし、教祖に代りて神意を傳ふる者の特に愼むべき事なりとす。

我が國法の大本なる憲法二十八條には

日本國民ハ安寧秩序ヲ妨ゲズ及臣民タル義務ニ背カザル限ニ於テ信教ノ

自由ヲ有ス

とありて此規定に背かざる限りは、如何なる宗教をも信ずるを許るされ居る難有き國なり、然るに若し風俗を紊亂し、又臣民としての義務に背くが如き事あらば、そは此憲法の規定に悖るものなれば、直ちに官の罰する處となりて、其信仰は禁ぜられるべし、如斯は憲法の規定のみならず、其の教理にも反するものなれば、最も注意すべき事なり、此臣民たる義務の如何なるものかは、既に前に說き盡しあり、又教典を熟讀せば自ら明なるべし、安寧秩序を妨ぐるとは、國の正しき秩序安泰を紊すが如き行爲を爲すを云ふ、之又其罪惡なる事は教祖の屢說かれし處にして前に詳しく說明せる所なり。

誤解の基（一）

今日四百三十万以上の信徒を有し駸々乎たる勢にあり乍ら、天理の教程世の誹

謗を受け居る宗教はなからむ、然れど此誹謗の如きは、教祖の受け給ひし、迫害に比べては、意に掛くるに足らず、乍併何故に斯く誹謗を受くるかを知らざるべからず。

天理教のみならず、何れの宗教にても、其起り初めにありては、國家の壓制、他宗教徒の妨害と闘ひ、教祖即ち最初の宣傳者は、あらゆる迫害艱難と闘はれしものにして、其漸く世の誤解も去ると共に、教理を慕ふ者追々に増加するに至る、されば佛教にても、基督教にても、教祖の沒後に盛になりたるものにて、我が天理教も同じ事なり、然るに世間にては天理教の御神樂勤が目慣れざる儀式なるこ、御神樂歌の外に從來形式整ひたる教典なく而も御神樂歌に用ひられし詞が、大和の國の方言を其儘にて、種々奇妙なる譬喩を書き列ねある爲め、其譬喩の意味を解し得ず、何こなく異樣に感ぜらるゝよりして、第一に誤解せられしなり、然れど之は天理教のみならず、釋迦如來の教えも、孔子の教えも、基督の教えも、皆世在中は精

神を傳へられしものにして、今日に傳はれる御經、書物、聖書等は何れも之等の教祖が沒せられて後、弟子に依りて、書き殘されたるものにて、教祖自ら書き遺されし物には非ず、若しありても極めて簡單なるものゝみ、長き年月の内に立派なる教典も出來、學者により書き遺されて形を整ふるに至りしものなれば、未だ年月淺き、其の天理教に美しき教典なしとて嘲ける人は、形を見て實を見ざる人の誤解なれば、聽て判る時來るべし、御神樂勤に就いても、佛教には和讃念佛蹈り等あり、基督教には讃美歌あり、之等と變りなし、唯形を異にするのみなれば、其精、神を見ずして一圖に誹謗は考淺し。

誤解の基（二）

世間誤解の基は、前章に說けるが如く、聽て氷解するの日來るべし、然るに信徒教師等の中にも、往々此誤解の基を作れる者なしとせず、そは信徒教師等自ら教理

を知り得ずして、一種の迷信よりして、屢教理に悖れる、間違ひたる言行を爲す者あり、教祖の旨を覺り得ずして、他の宗教等の惡口を言ひ、又僻みたる心を持ち、博愛の精、神を忘れ、人倫の道にはづれたる行をさへ爲すものあるが爲めに、世間にては斯る者一人を見ても、教徒全體が皆如斯なりと爲し、一犬虛を吠え、万犬實を傳ふるの譬に洩ず、口より口に傳はりて、誤解を招く基となり、誹謗の聲今に絶えざるなり、教徒教師中に自ら我が教理を誤解する者絶えざる内は、世間の誤解誹謗は何時迄も止まさるべし、愼まざるべからず、然れば教師として人を導くの職に在る者は勿論、其他信徒全體は我が心を正し行を愼み、能く神意の有る處、教祖の御旨の基く所を究め、教理を探して、自らの誤りを直し、世間の誤解を去らざるべからず、苟にも教祖の教えに悖り神意に背く勿れ、自らの心正しく眞の信仰あらば、世人の誹謗迫害は恐るゝに足らず、又誤解を釋く事も難からず、自らの心正しからず、信仰なくして人に說かんとせば、益々誹謗迫害を增すのみ、こは世間の

惡しきに非ず、自らの惡しきが爲と知るべし。

御神樂歌讀み方

御神樂歌は、極めて通俗なる語にて、書き下されたるものなれば、別に讀誦に困難ならず、唯大和方言のわかりにくき人はあるべし、然れども御神樂歌は、讀のみにては何等の役あるべからず、此中には教祖の總べての教え、天理教々理の悉くを含み居るものなれば、其精、神を知るに就きては、讀方の心得なかるべからず、御神樂歌の精、神は、本書の全部之を傳ふるを目的としたるものなれば、讀む人は自ら知る所ならんも、特に注意すべきは、文句を暗誦する程讀み、大和の方言を知り得たるのみにてはこも、亦何等の役なきものとす、されば先づ、讀誦の前に當りては御神樂歌の全體が、全く譬喩のみにて成るものと知るべし、譬喩は或事を說くに他の事柄を用ゐたるものなれば、却りて廻りくどき樣思ふ者もあらんかなれど、

そは簡單なる言辭の中に深き意味を含ませむとするには止むを得ざる手段にして、譬喩は學問なきものにも事に托して記臆に便り能きものなり、されば、教祖も深き意義幾多の教訓を有する宗教を當時無學なりし信徒等に遺さるゝに、難解の文章文字を用ゐて、一々理窟を書き列ぬるの却りて人心に入り難きを思ひ給ひ、斯の通俗にして而も趣味ある詞にて、簡單く書き遺されしなれば、能く味ふに於ては幾多の意味教訓を發見すべし、語短く意味深き譬喩を用ゐて、教を宣傳せしは、天理教の教祖のみに非ず、多くの宗教の教祖皆同じきなり、然れば御神樂歌を讀むには、一つの文句と雖も、種々に解すべきものなれば、其心して讀むべし、然らざれば眞に教理を知り得ざるべし、本章は御神樂歌の註釋とも見るを得べく、尙詳細は管長の著されし御神樂歌述義なるものあり、就きて見るべく、著者は、切に讀者に勸告するものなり。

信徒の心意

以上述べたる處を個條書きにして信徒の通覽に便せば、左の如し

○世界の森羅萬象は唯一の神の造り給へるものなり。

○神は靈妙なる力を有し給ひ、總べてのものは、此靈妙なる働きによつて出來、又變化するものなり。

○神は萬能に坐し、世界の事は如何なる微細なる事にても、鏡に物の映るが如く神は知り給ふなり。

○神は水の如く清く廣くして、地の底、空の上までも濡し給ひ、又凡べての穢れを洗ふて清くし給ふ。

○神は現世に實在せり、即ち我等の心の中に宿り給ふ。

○人間も神の靈妙なる御力により造られしものなれば神と等しく水なり、故に

元と清きものなりしに自ら求めて濁りたものるなり。

○大源の神の清きを知り、我が心の濁れるを覺らば直ちに懺悔すべし懺悔は心の底にある泥を掃ふ初なり。

○罪と覺れる者は幸なり、聽て許さるゝの時來らん。

○神は祈らず敬はざる者を救ひ給はず、未だ心に穢あるを覺らざればなり。

○神を敬ふ者は皇室に忠勤を盡すべし、之神に使ふる所以なればなり。

○神の前には階級なし世界悉く同胞なり、神は平等に人を愛し給ふ。

○先づ夫婦和合せよ、夫婦は神が天地を象りて作り給ひしものにて、是より世界の創まりしものなればなり。

○和合と博愛とは神の意に叶ふ、忠君愛國の念、世界の平和も茲に基くなり。

○教祖は神の御使にして我等を幸に導き給ふなれば一意其教へに隨ふべし。

○教會は信仰の團結なり建物に非ず。

○教師は教祖に代り教を宣布するものなれば、教祖に賴る如く教師に隨ふべし。

○神は實を好み形を採り給はず、心なき禮拜は却りて神を辱むるものなり。

○何事も誠實の心を以てせよ。

○人の爲めに犧牲となるの覺悟なかるべからず、然らば汝は永遠の生命を得べきなり。

○極樂は此世にあり心正しく神を信ずる者の前に現はるべし。

○己を惡み人を惡むべからず。

○眞心を以て神の道を傳へよ、されど人に强ゆべからず、來る者の自由に任すべきなり。

○神の前には小兒の如き心となりて慕ひ行くべし、小兒には罪なければなり。

○他の宗教を誹る勿れ、其說く所異なるも世界に安心立命の道を說かんとする目的は變りなければなり。

結論

本書が如上反覆説明したる處、或は重複に渉りたる節なしとも保し難けれど、御神樂歌の條下に於ても述べたるが如く、教祖は平易、通俗を旨とし暗誦に便り宜からしめんが爲め、僅々十二下りの間に於て廣大無邊なる教義を述べ給はむとし給ひしなれば、譬喩を用ひ、例を引き給ひたるが、同一の譬喩にても、表裏反覆總ての方面より觀て、其中に種々諸々の意味ある、各方面より之を説明するの必要ありて茲に到れるものなり、吾人は忠實なる態度、周密なる注意をもつて教理を按じ御神樂歌を極め、遠く教祖神憑の當時に遡り、深く教祖宣傳の心中に立ち入り、總ての著書總ての教規を調べ、全力を捧げて最も寛容なる態度を以て叙述し來れる處のものなり、されど本書の趣旨たる、天理教の教理其他と他の宗教々理等との比較研究其他の理論を議するを目的とせず、只忠實に敬虔なる念を以て

平易に懇切に通俗に、天理教の各方面を詳述し、説話したるものなり。

徒らに嘲罵し、嗤笑し、迷信なり、邪教なりとする者、本書を讀破一番して政府が獨立を認可したる所以に思ひ到り、よし之を信ぜざるも妨げざる限度に於て、同情を持たざるべからず、教祖は一婦人に過ぎず、無學文盲なりし老婦人なりしに過ぎず、されど其敬虔なる態度、熱烈なる信仰の遂に今日あるに至りたるを思はゞ神の攝理の偉大なるを感ぜざるべからず、古來宗教の開祖は時代以上に超絶したる豫言者なるを以て、淺慮短見なる時人は必ず、見て以て痴とし狂とし、迫害を加へ艱難を與ふるが、常なれど、後代に至りては必ずや萬人讃嘆憧憬の中心となりて、永遠の生命を得るに至るなり、天理教の宣傳し初められてよりは未だ七十年に過ぎず、時人の迷信と罵り、邪教と嘲けるは宣なり、されど教祖の熱烈なる精神は傳へて教長にあり、精神の開拓を主とせる教理は信神の信念を益々鞏固ならしめ以て今日の隆盛を致せり、將來の發達流布、刮目して見るべきなり。

嘗て　陛下大和に行幸し給ひし折、鳳輦に扈從せし一老將軍の談に曰く、當時陛下の行幸を奉迎したるは、諸官衙公吏、貴紳庶民山の如く隊を組み、伍を爲し恭敬の態度頗る嚴然たる者ありしも、天理教徒の一隊の如く、威容端嚴、一絲紊れず一毫も犯す能はざるものあるを見ざりき、歸來熟ら思ふに、天理教の教理たるや日本建國の精神と合致し、尊皇愛國の信念を鞏固ならしむるに力あるを以てなるべしと、又た內務省斯波宗教局長の談なりと云ふを聞くに、天理教は日本に生れ日本固有の趣味を帶び、色彩を有すれば、國家的觀念の養成與りて力あるべく畏くも、教育勅語の御精神と並び行ふて、些の予盾あるを見ず、憧着あるを見ず、是其の獨立を認可したる所以なりと、猶又頃日、新紙の傳ふる處に由れば、皇城前を通過する毎に車臺の上より皇居に向ひて恭しく脫帽禮拜するを常とせる電車車掌あり、渠素より學なく、教なき、渺たる一車掌に過ぎざりしも、渠の斯る敬虔なる態度に出でしを取調ぶるに當り、渠が熱心なる天理教徒たるを發見せり、嗚呼

誰が天理教を目して迷信とし邪教となす者ぞ。

天理教に關しては此書以外に云ふべきもの少からざるものあらんも知れざれど、吾人の態度としては總てを盡し而も忠實に之を紹介したるものなることの自信を有す、尙ほ重複を厭はず、卷末教典、教祖略傳及び祭典儀式の場合に用ゆる雅歌『神の御國』並に『天理教唱歌』を附して信者末信者の爲め、本書をして最も意義ある册子たらしめむこせり、以て一粲を博するに足らむか。

教祖略傳

天理教附沿革概要

教祖の略傳

附　天理教沿革概要

斯教の信者はもとより、信者に非ざるも凡そ天理教の如何なるものなるかを知らんとする程の人は教祖の爲人、及び天理教の沿革位は知らざるべからざるなり、而して本論を熟讀せる人は既に其一般を知られたらん、然れ共順序を追ふて誌したるものに非ざるを以て左に其概要を一粲に供す。

教祖の傳記に就きては、從來出版せられしものあり、又種々の書籍に散見せるものなきに非ずと雖も、謬りを傳ふるもの少なからず、今茲に誌したるは、確實なる材料により、本部の閲をも得たるものなれば、單簡なるも決して誤りなきを信ずるなり。

教祖中山美支子は、寛政十年四月十八日を以て、大和國山邊郡朝和村大字三味田に生る父を前川半七正信と云ひ、母を絹子と云ふ、前川氏は領主藤堂家より名字帶刀を許されたる地方の豪農なり、正信は天性誠實温厚にして鄕里に尊敬せらる、絹子は長尾氏の出、亦孝順貞淑にして慈悲深かりき、正信の子男女五人あり、美支子は實に其長女なり、幼より多く戸外の遊戯を好まず、又衣裳を飾るが如き事を爲さず、常に父母の側にありて習字裁縫機織等を習ひ居たるが、資性聰慧にして强記なりしかば、通達甚だ速にして、縫織の手藝の如き精妙既に夙くより人を驚かしむるものありき、又言語動作優美嫻雅にして、兩親には孝心篤く兄弟には友情深かりしかば、近隣の人之を異とし嘆賞せざるはなかりき。

前川氏は世々淨土宗の信者なり、美支子素と蒲柳の質にして靈資深沈なりしが夙くより父母に從ひて信佛の心を起し、經を誦する事を好めり、信心の漸く

熟するに從ひて、遂に出家遁世の志を起し、剃髪染衣となりて、清淨重貞を保たんと欲し、之を父母に請ふこと屢々なりしが、當時の尼僧には破戒墮落して、身を汚すもの頗る多かりければ、父母は之に鑑みて其請を許さず、婚嫁して人倫を全うせんことを諭しければ、美支子は遂に父母の意に從ひて、切なる志を飜へし、先づ婚嫁の後と雖も、毎夜夜業を終はりたる後は、念佛勤行を許さるべき約を得て、十三歳の時同郡庄屋敷村なる中山善兵衛に嫁せり、中山氏は前川氏の重縁の家にして亦地方の豪家なり、其邸地は即ち現に天理教會本部の在る所なり。

美支子既に中山氏に嫁し、夫に事へては貞操を盡し、婢僕に對しては恩情を垂れ、賓客に接しては懇遇を旨とし、而して一切の困病は怠情に出るものなりとして、日々家事に勤勞し節儉にして浪費を戒め、己れに奉ずる事薄くして、他の益の爲には豐かに財を抛つを吝まず、殊に慈悲の心極めて深く、一鄕其風を欽

仰したりき、美支子二十四歳の時、長男秀司を生み、二十八歳の時、長女政子を生み、三十歳の時二女安子を生む、時に中山氏の隣家に足達氏と云ふものあり、大庄屋を勤めたりしが、其子照之亟母の乳汁足らざるを以て、日々に衰弱しければ美支子は之を憐み、安子誕生の翌年、自身三人の幼兒あるにも拘はらず、照之亟を已が家に迎へて慈育したり、然るに照之亟は俄に疱瘡に罹りて、病質極めて悪しく日を經て黒疱瘡に變じ重態となれり、初め足達氏には五子ありしが皆夭死し殘れるものは、獨り照之亟のみなりしかば、兩親の憂愁言ふべからず、醫師に託し百方手段を盡しかども、皆其効なし、美支子は之を見るに忍びず、且つ自ら進んで哺乳の任に當りながら、若し之をして死なしむるが如き事あらば、何の面目かあらんと、深く自ら決する所あり、吾が子は介抱の爲に妨げありとて、安子を他家に託し、夫にも知らしめずして、産土神社に百日間の跣足詣の願を立て深夜人靜まるを待ち社前に至り、有らゆる神佛の名號を稱えて、

照之亟の病の平癒せんことを祈り、若し此の兒の壽命限りありて、到底死を免れぬものならば、長子を除きて我二子を以て之に代へ給へ、猶足らずば我命をも捧げ奉らんと心血を絞りて祈念を凝らしゝが、至誠上天に通じけん、照之亟の悪疾も日ならずして、平癒せり此の後安子は早世し更に四女常子を擧げたれども、亦四歳にして夭死せり、美支子は一般の人を見ること親子兄弟の如く、歡樂を共にし痛苦を分ち、他の困難を見れば、身を忘れて之を救護し、飢者には食を與え、凍者には衣を與へ病者には藥を與へたる類擧げて數ふべからず、今其一二を示さんに、一夜盗人あり、中山氏の倉庫を破りて入り、俵物を盗み出さんとす、奴僕等捕へて之を縛し、官に送らんとす、美支子聞きて之を止め、奴僕に諭して曰く、盗難は我の油斷より起る、我にして心を用ゆる所あらば、盗人何ぞ入ることを得ん、且つ今此の俵物の盗まるゝは、其早くより我に屬せざりし證なり、此の理を知らば、深く自ら顧みて他を赦さざるべからずと、盗人を牽き來

らしめ、之を見れば村人の一貧者なり、美支子驚き懇々として説いて曰はく、如何に貧なればとて、何とて盗心を起されたるぞ、生活に窮したらば、勞働して身を助け忍耐して勤勉し、正直にして節儉を守らるべし、此の如くにして猶足らずば我家に來られよ、必ず施す所あらんと、深く後來を戒め、白米一斗を與へて還らしむ、盗人唏噓して言ふことを知らず、叩頭して罪を謝し歸り去れり。

又嘗て一人の女乞食あり、身には襤褸を纏ひ、裸体の乳兒を抱きて門に立てり、時方に暮秋空は暗憺として木枯の風吹き荒べり、美支子之を見れば兒は乳汁の足らざる故に、身痩せ色青く眼窪み頰落ち、母は蓬髪垢頭飢寒の爲に、聲顫ひ氣息奄々たり、美支子大に之を憐み、折しも收穫時の多忙なるをも顧みず、母には先づ自ら粥を暖めて之を與へ、更に乳兒を取りて已れの懷に入れて、乳を飽かしめ其漸く眠れるを待ちて、之を母に渡し、別に衣類を與へて還らしめたり、美支子の夫善兵衛、嘗て其婢加乃に通ず、美支子之を知れども毫も嫉妬の色な

く却りて加乃を愛して妹を見るが如くし、加乃が他出の時は手づから髪を結び、已れの衣服櫛笄等を貸し與へ、美しく粧飾せしめて遣したり、然るに加乃は性邪にして美支子を殺し已れ正妻たらんと欲し、一日毒を味噌汁の中に入れて美支子に侑む、美支子知らずして之を喫し、忽ち腹部に激痛を感じ苦悶して遂に昏倒せしが幸にして蘇生せり、美支子加乃の所爲なるを知れども、其愚を憐みて辭色に見さず、益々加乃を愛しければ、流石の加乃も遂に其德に感じて、已が罪を懺悔し、暇を請ひて家に歸れり、美支子の慈悲は實に天禀に出づ、後日立教傳道の天命を受けたるもの、固に其素ありしなり。

天保九年、美支子四十一歳なり、此頃美支子は心身の際遇漸く繁劇にして、多く沈思の境に入り、深く世事を痛む色あり、此年十月廿三日、長子秀司病に罹る、人々修驗者市兵衛と云ふものに請ひて、平癒を祈らしめたり、美支子亦其坐にありしが忽にして神靈に感合せる所あるが如く、俄然として身上に奇異を現し、

音容儼として、救世濟人の神命を宣せり、人々怪み見て狂せりとなし、敢て耳を傾くるものなし、然れども美支子は益々説きて已まず、言語爽朗にして直ちに人の肺腑に入るが如く、容貌は肅乎として威嚴犯すべからず、廿六日に至りて、人々始めて神命に接する思をなし、其教を遵奉せん事を誓ふ、是實に天理教立教の始めなり、是より美支子は一身を此の道に委ね、世界人類の救濟を以て已れの天職と確信し、一重に神明の附託に背かざらんことを期せり。

美支子の慈悲心は天禀なれども、此時以來益々其深大を加えたり、思へらく自ら困苦の境に入り、險坂を攀ぢ、峻路を踰え、荊棘を披き劔火を犯すにあらざれば眞に艱難の情を解すべからず、艱難の情を解せずして、他の艱難を救ふべからずと、是に於て入嫁の時携え來りし五荷の物品を出し、貧困者の分に應じて之を施與し、其盡くるに從ひて、漸次中山家の財寶に及びたり、以爲らく一切の災害病苦は皆心の新造なり、宜しく慾塵を除去して、心を淨境に歸し、一切の禍

害より免れて、神人和樂の妙域を拓くべきなりと、是より諄々として教化の人となれり。

然れども時人は美支子の言行を解せず、或は見て以て狐憑となし、或は狂となし、罵詈嘲笑至らざる所なかりしが、美支子は措きて意に介せず、一意神命附託の大事を奉じたり、善兵衛は一は世間の嘲罵を愧じ、一は家道の傾覆を恐れて、美支子の心を飜さんとし、親戚知己等と百方手段を講じ、時には白刃を提げて之を威嚇するに至りしかども、美支子は從容として却つて其過を戒め、爲に懇ろに天啓の教旨を説き、且つ自己が救世濟人の天命を奉ずるものなることを諭したり、然れども美支子は善兵衛の痛心甚だしきを見て飜つて思へらく、我心神と通じて一體なれども、我身は猶是れ人間の妻なり、良人をして苦惱せしむること、此の如くなるに忍びず、寧ろ此の身を亡して良人の苦惱を救ふべし、と即ち深夜人靜かなるを待ちて近傍なる池中に投ぜんとせしが、池畔に攀ぢ

んとすれば、兩足俄かに緊縮して自由を失ひ、且天來の聲耳邊にありて、之を止むるものゝ如くなりしかば死を遂ぐる事能はず、此の如くなること前後數回なりしと云ふ、美支子又親戚の誤解を去り、世人の疑惑を晴さんとして、五十一歳の時近隣の女子を集めて裁縫を教授し、以て家政を資けたり、而も其救世濟人を以て天職とする所の精神は牢乎として拔くべからず、益々施與を事とし、宣教に務めしかば、家道は愈々衰頽して世人の嘲罵は益々甚だしく、親戚は遂に往來を斷つに至れり、

美支子五十六歳の時、善兵衛世を辭す、美支子禮を厚くして之を葬る、爾來美支子は益々慈善を勵み、宣教を盛にせしかば、左しも素封家の聞えありし中山氏も、祖先傳來の財産をば悉く蕩盡し、今は衣食にすら窮するに至れり、茲に於て嗣子秀司は紋服して、野菜薪炭を擔ふて之を賣り、美支子は耳順に踰えたる齡を以て、紡績裁縫等を躬らし、纔に家族の糊口に資せり、美支子常に家族を戒め

て曰く「貧苦を訴ふることなかれ」「哀を人に乞ふことなかれ」「艱難辛酸を快きことにするは人間の務なり」と、此の如くにして布教に力めしかば、其化漸く廣く嚮に罵詈嘲笑せしものも今は其德を欽仰し、教を聽かんとして遠近より慕ひ來るもの、日々に多きを致せり、

教化漸く廣まりて、之を信ずる者益々增加すると共に、神官僧侶の之を嫉妬するものあり、村民を煽動して黨を成し、說教祈禱を妨害せしめ、暴行をなさしめたり、慶應二年の頃小泉村の不動院と云へる修驗者、多くの徒弟を引率して來り、美支子を威嚇して屈服せしめんと欲し、白刃を揮ひて其眼前に立ち、色を起し聲を勵して、師弟代る〳〵種々の難問を試みしが、美支子聲色自若として、之に應じ、懇々其暴行を戒めければ、不動院も其說に服し、德に感じ罪を謝して歸れり、又守屋筑前と云へる神官あり、守屋大連の後裔と稱し博學多識の名あり、美支子の事を聞きて謂へらく、無智の老媼名を神命に假りて教を說くは是れ

世を欺き民を惑はすものなり、我將に彼を說破して其眞相を暴露せんと、一日衣冠を着け、嚴然として美支子の家に至り、問難數番、議論數刻に亘りしが、遂に美支子の爲に說服せられ、感歎して其敎の廣布を助けん事を盟へり、守屋氏は神祇管領吉田家に隷屬し、大和一國神官の取締たりしを以て、秀司を吉田家に介し、神道布敎の事を出願して其許可を受けしめ、美支子をして公然布敎する便宜を得しめたり、時に慶應三年七月二十三日なりき。

美支子齡を重ねるゝ共に其德益々高く、其名聲を聞き、四方より集まり來り、靈救の恩に浴せんとするもの、門前市をなせり、是に於て神官僧侶等の嫉妬益々甚だしく、中傷讒誣行はれしかば、從ひて官衙の嫌疑を受け、干涉を蒙むりて屢々喚問拘禁せられたり、明治八年美支子及び秀司は、奈良縣廳に召喚せられ、數日間監獄に拘留せられしが、美支子歸宅の後五女小寒子歿せり、其後明治十四年には秀司歿し、十五年には秀司の妻松枝子亦死せり、美支子暮齡に及びて恃

む所を喪ひ、且官衙の干涉益々甚だしかりしかども毅然として毫も沮喪の色なく、斯道の普及を以て自ら任ぜり、明治十九年五月神道事務局より取調べの爲に、管長代理古川豐彭及び內海政雄の兩氏出張す、兩氏美支子に面して敎理を聞き其深奧博大なるに感じて曰はく、是れ常人にあらず宜しく速に布敎傳道の手續を了すべきなりと、乃ち神道事務局の部下に屬する事とせり、然れども、公然の手續は尙ほ未だ了するに至らず、是を以て官衙の干涉尙息まず、明治八年より十九年に至る迄、拘引監禁せられたること殆んど二十回に及べり、美支子は毫も之を怨む色なく、拘留中も從容として坐臥すること、自宅に在るに異ならず、自ら苦艱を知らざるものゝ如くなりしかば、監視の吏窃に歡服せりと云ふ、而して其放免せられて歸る時は、四方の信徒雲の如く集まりて、歡呼の聲雷の如く、車幾百輛、人幾千人、道路絡繹として其門前に達せり。

此の年の末に入りて美支子身體不例なり、戶主新治郎を始め、高足弟子及び信

徒等美支子が九十歳に垂〳〵とする高齢を以て、重ねて拘禁等の處分を受けなば、萬一の虞あらんをを恐れ、暫く神事を中止せんことを議せしが、美支子は斷乎として之を斥け益々不退の勇猛を鼓して、邁進すべき道なる事を諭し、是より教誨愈々急切にして、時として、十數日間に亘れり、越へて二十年一月二十六日美支子歿す、此の前日より親戚弟子等を膝下に集めて、更に遺訓する所甚だ懇切殷懃なり、曰く時機既に迫れり、汝等平素我が教ふる所を服膺して、此の道を宣傳し、勇進して顧慮すること勿れと、時に美支子九十歳、人々哀哭痛悼せざるはなかりき、初め神命を奉じて、此處に至るまで五十年、謹して眞道彌廣言知尊命と稱す、其遺骸は初め善福寺の境内に葬りしが、明治二十四年に至りて、豐田山に改葬せり、時に信徒老幼男女相携へ、先を爭ひて來り集り、多きは日に二千人少なきも千五百人を下らず、工事を助けて山を削り、石を疊み樹を植え、道を開き墳を築き垣を搆え、僅々八十餘日を以て大工事を完了せり、今教祖の墓地

と稱するもの是なり

美支子の歿後、弟子及信徒等は、其遺訓に從ひ、奮勵して布教に從事せしかば、其教忽にして四方に擴張し、明治廿一年天理教會設立の認可を得、明治四十一年十一月廿七日、遂に内務省より獨立を認可せられ、爾來今日に及び、其教化は北海道より南は臺灣に至り、更に韓國清國に波及し、信徒の數四百三十万餘人、教師の數二万餘人、教會の數二千四百餘箇所に達したり、美支子は素と民間の一婦人に過ず、而して其人の子となり、人の妻となりて、孝順貞淑慈悲溫柔なりしこと已に一世の模範となすに足れり、其教を立てしより救濟の爲に艱苦に處すること五十年、没後に及びては、其德化滾々として盡きず、教義の普及せる事前述の如し、至誠天に通じ、至德神と合して、能く其附託に堪えたるにあらずんは、焉んぞ能く玆に至らんや、天理教の今日あるは固に偶然にあらざるなり。

天理教教典

天理教教典

第一　敬神章

本章は、天神造化成育の霊徳妙用を説て、萬物調攝の天理に及び、人類たるものは、必ず、神祇を崇敬せざる可からざる所以を明にせらる。

天地の悠久にして、萬物の生成化育息まざる所以のものは、神明調攝の天理に依る。宇宙の森羅萬象、皆、其霊徳の妙用に基かずと云ふことなし。而して、主宰の神あり。分掌の神あり。各、其霊徳の妙用によつて、神名

を表彰す。概して、是を、天神地祇八百萬神と云ふ。是を以て、其靈源に逆れば、即ち、一神に歸し、其妙用を分てば、萬神に亘る。蓋し、造化の大原にして、萬有の根本也。誰か、尊仰敬事せざらむや。然れども、八百萬神、悉く其名を稱へて崇拜せむことは、人の能くせざる所なり。故に、靈德の最も顯著なる十柱の神を擧げて奉祀す。即ち、國常立尊、國狹槌尊、豐斟渟尊、大苫邊尊、面足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉冊尊、大日孁尊、月夜見尊、是也。之を

總稱して、天理大神と云ふ。

謹みて案ずるに、天地未だ剖判せざるの時、天神まづ成り給ひ、至大至妙の靈德を以て、造化の首をなし給ふ。されば、之を主宰の神とも稱へ、造化の神とも仰ぎ奉る也。次に、天地につぎて、數多の神成り出で給ひしが中に、伊弉諾、伊弉冊の二神、主宰の神より、此の漂蕩へる國を修理固成との詔命を受け、天瓊矛を賜はりて天降り給ひ、自凝島をかき成し、其島に、八尋殿をみたてゝ、こゝに、夫婦の道を興し、大八洲國を始め、所有神々、所有世界萬物をも生成し給ひしより、其所有神々各靈德の妙用を以て、所有世界萬物を分掌し給ふことゝなれり。是れ、各分掌の靈德を以て、神名を表彰し奉る所以也。斯の如くにして、宇宙の森羅萬象、悉く、神の造り給ふにあらざるものなし。神、更に、神を生み、神、更に、物を造り、愈岐れて、愈多く、こゝに、天神地祇八百萬神あり。されば、此伊弉諾、伊弉冊の二神を、二靈とも、萬有の祖とも

仰ぎ奉る也。是に由て、之を觀れば、天地造化の大原は、天神の靈德に基し、萬物生育の根本は、二靈の妙用に存す。蓋し、天地の悠久なる、萬物の活動する、即ち然らしむるものあるにあらざれば、然ること能はず。其然らしむるものは、即ち、神にして、其然るものは、天理也、天理とは、神明調攝の妙用を云ふ。河嶽の大、毛髮の微より、水陸の起滅、元素の離合に至る迄、悉く、天理に依らざるはなく、其妙用の異なる所、神名の、由て起る所以なり。是を以て、其妙用に從て、靈源に遡る時は、八百萬神、遂に、主宰の神の靈德に歸す。譬へば、月の、百川に映ずるが如く、月輪の外、別に、百川の影あるにあらざる也。故に我教祖は、天神地祇の靈德妙用を統稱して、天理大神と崇め奉られたる也。猶、特に、國常立尊、國狹槌尊、豐斟渟尊、大苫邊尊、面足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉冊尊、大日霎尊、月夜見尊、十柱の神を、表名して奉祀せられたるは、唯、靈德妙用の、最も顯著なるのみならず、教祖の、本教を發揮せらるゝに當て、專ら、此の大神等の恩賴を蒙られしに依

りてなり。

第二　尊皇章

本章は天神、特に人類を愛念し給ふ所以を說て、我皇室の淵源に及び、敬神、尊皇、一致なきの義を明にせらる。

神は、萬有を主宰し、皇上は、國土を統治す。國土は、神の經營し給ふ所、皇上は、即ち、神裔にして、皇上の、此土に君臨し給ふや、實に、天神の命に依り、其生成せる蒼生を愛育し給ふにあり。世界の廣き、古今、國を建つるもの無數にして、其、帝たり、王たるもの、亦多しと雖も、我

皇室の如く、神統を繼承し、天佑を保有し、國土綏撫の天職を帶び給へるもの、何處にかある。即ち知る、我皇室は、君主中の眞君主にして、寶祚の、天壤と共に無窮なる所以を。故に、須く、我皇上は天定の君主なるを確信し、造化生育の恩を、神に謝すると同一の至情を以て、誠忠を皇室に盡さゞるべからず。

謹みて案ずるに、天神造化の首をなして、天地を主宰し、二靈、群品の祖となりて、八百萬神、萬物を分掌し給ふは、猶皇上の、諸僚百官を率ゐて、此の國土人民を統治し給ふに同じ。即ち、前章に示されたる如く、伊弉諾、伊弉册、二柱の神、天

神の詔命を以て、世界萬物を生成し給ひ、修理固成の事を行ひ給ふや、就中、人類を最も重しとし給ひ、此の國土を以て、人類蕃殖の地と定め、萬物を取用して、其生存發達せむことを期し給ふ。故に、萬物には、分掌の神あり。國土には、統治の君あり。萬物、取りて盡きず。寶祚、終に窮なし。皇祖天照大御神、皇孫瓊々杵尊に、詔命して曰く、豐葦原千五百秋瑞穗國は、是、吾子孫の、主たるべきの地なり。爾皇孫、就て治すべしと。かくて、皇孫に、鏡劍璽三種の神器を授け、天津日嗣の高御座に即け奉り、五伴緒神、及び、八十伴緒神を添へて天降し給ひ、國土に君臨せしめ給ふ。是を、我皇室の始めとなす。されば、皇上は實に天神皇祖の神裔に坐し、皇上の、此の國土を統治し給ふは、即ち、天神の命に依て、其生成し給へる、蒼生、即ち、人類を愛育綏撫し給ふ爲めたるを知るべし。是の故に、天壤無窮の神勅空しからず、一系連綿として、列皇列聖、相受け、相紹ぎ、仁は、春風の如く、威は、秋霜の如く、仁澤、内に溢れ、光威、外に洽きもの、我皇室の、皇室たる所以

にして、世界の廣く、古今の久しき、其間に於て、國を建て、朝を起し、帝となり、王となるもの、無數なりと雖も、社稷祀らず、鬼饗餐うるもの、比々、皆然りとなす。我皇室の如く、天神皇祖の神統を紹ぎ、皇天の佑助を受けて、萬古、一日の如く、國土靖撫の天職を帶び給へるもの、未だ、其例を見ざる所也。

凡、人、一たび、天神化育の恩の無限なるを尊信せば、皇上統治の恩の、極めて高大なるを認識し、報効の道を圖り奉らざるべからず。之を、幽冥にしては、神、之を、顯明にしては、皇上、其の間、決して、一致あるを見ず。されば、教祖が、我皇上を、天定の君主なりと確信し、神恩を、神に報ずると同一の至情を以て、誠忠を、皇室に盡さゞるべからずと云はれたるの至言なるを了解すべし。

第三　愛國章

本章は、天神、國土を生成し、之を、人類に賦與し、其進歩發達を期し給ふ所

以を說て、皇室と、國土との關係に及び、愛國の義を明にせらる。

國土は、神の經營して、人類蕃殖の地と定め給ひ、其神裔たる我皇上をして統治せしめ給ふ所なり、是を以て、凡、臣民たるものは、此の神意を奉じ、皇旨を體して、神を敬し、皇上を尊むと共に、之を愛護し、常に、其世運の發達を圖りて、修理固成の功を收めむことを期すべし。況んや、我祖先は、神恩皇澤の下に、此國土に棲息し、義勇報國の誠を致し、世々、皇運を扶翼し來れるを

や。是神に事へ、皇上に仕ふるの道にして、抑も、亦我祖先の志を濟す所以也。

謹みて案ずるに、神明、靈德の妙用を以て、この國土を修理固成し給ひ、更に、人類をして、其の功を收めしめむことを期し給ふ。是を以て、我皇室、神命を奉じて、皇位に卽せ給ひ、天下に君臨して、國土を統治し、蒼生を愛撫し給ふもの、一に、其平和幸福を進めて、天神愛念の大御心に報ひ奉らむとするにあらざるはなく、歷朝の聖主、仰では、天神の詔命に負かず、俯しては、民庶に、疾苦なからむことを以て、叡慮となし給はざるはなし。されば上に神意とは、此の天神、皇祖の、國土人類を愛念し給ふ大御心を指し奉り、皇旨とは、其大御心を體して、我等臣民を愛撫し給ふ、至仁の叡慮を指し奉れるものと知るべし。故に、我等臣民は、此の神意を奉じて、神祇を敬ひ、此の皇旨を服膺して、皇上を尊むと共

に平時に在りては、學術を修め、技藝を習ひ、或は、殖産に、或は、工業に、各其職業を勵み、勤勉力行、生々蕃殖して息まず、天神賦與の本分を全うし、戰時に在りては、智略を講じ、武勇を奮ひ、忠烈を効し、我は、防禦に、我は、攻戰に、各、其任務を盡して、死を辭せず、我皇室の稜威を發揮し奉り、國家の進歩擴張せむことを期すべし。是を修理固成の功を收むと云ひ、また、愛國の本義とは云ふ也。特に、我等臣民の祖先は、此の國土ありてより以降、神恩皇澤に浴し、皇室統治の下に栖息し、百年以前の祖先は、百年以前の皇室に仕へ、千年以前の祖先は、千年以前の皇室に仕へ、事あるに莅では、所謂忠勇報國の誠を致して、其正大雄偉の氣、時には、旭日に匂ふ山櫻となり、時には、富嶽千秋の雪ともなりて、世々、皇運を扶翼し來りたるものなれば、我等臣民が、今日、此の教を守りて、國土を愛護し、其隆運を計るは、卽ち、神に事へ、皇上に事ふるの道にして、また、我等祖先の志を濟す所以なりとは說かれたる也。明治二十三年十月三十日を以て、畏

くも、我皇上の煥發し給へる勅語の中に、「億兆必ヲ一ニシテ、世々、厥ノ美ヲ濟セルハ、此レ、我國體ノ精華ニシテ、教育ノ淵源、亦實ニ此ニ存ス」と宣り給ひ、「如斯ハ、獨リ朕が忠良ノ臣民タルノミナラズ、爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン」と宣へるは、我等祖先の誠忠を嘉賞し給ひ、臣民の遵守すべき大道を明し給へる所以にして、教祖が、上に反覆せられたるもの、亦、畢竟、此の聖旨を體認服膺すべきの意に外ならず。皇上の聖旨は、即ち、列皇列聖の大御心にして、列皇列聖の大御心は、天神生民愛念の神意に出づ。我教徒たるもの、須く教祖の、説く所に從ふて、皇旨を服膺し、神意を奉じ、益々、愛國の義を盡すべき也。

第四　明倫章

本章は、神明、彝倫の大道を、人に賦與し給ふ所以を説て、之を明にするもの、人生の通義たるの理を明にせらる。

暑往き、寒來り、四時行はれ、日月、其位を改めず、善榮は、惡泯び、正は贏ち、邪は輸す。天に在りては、之を、天道と云ひ、人に在りては、之を、人道と云ふ。既に、國土あり。人なかるべからず。人あり。父母妻子なかるべからず、故に、神明、人に賦するに、彝倫の大道を以てす。猶、天道の循環して、長へに、其軌を易へざるが如し。之を君父にしては、忠孝と云ひ、子弟にしては、慈友と云ひ、夫婦にしては、和順と云ひ、朋友にしては、信義と云ひ、一般人

類にしては、仁愛と云ふ。要は、自己の意を誠にして、他に對するの謂ひに外ならず。天に、天道なくんば、即ち、晦冥、人に、彝倫なくんば、是、人にあらざる也。須く、博く學びて、其理の有る所を明にし、篤く行て、其道の存する所を盡し、人生の本分を全うすべし。

謹みて案ずるに、天の長く、地の久しき、日月の旋轉するに因て、晝夜をなし、寒暑往來するに因て、四時行はれ、善惡正邪の所爲に因て、榮汎輸贏の報差あるものは、全く、神明調攝の妙用、即ち、天理によるものにして、此の天理の、天にありて行はるゝを、天道と云ひ、人に在りて行はるゝを、人道と云ふ。神明既に國土を經營して、人類蕃殖の地と定め、其進歩發達を期せしめ給ふ。是に於てか、

人類互ひに相對するの間に、自然の秩序無きこと能はず。秩序即ち、彝倫にして世道の由て立つ所以なり。今、其の、由て來る所のものを述べむに、天神、伊弉諾、伊弉册、陰陽二柱の神を生成し給ひ、此の漂蕩へる國を修成せしめ給ふや、まづ、夫婦の道を立てしめ給ふ。之れを、人倫の始めとなす。此に於て、陰陽の二神、多くの御子を生み給ふ。之れを父子の始めとなす。次に、其生れ給へる御子神等に、前後の次第あり。之を、兄弟の始めとなす。此を兄弟の神の子々孫々に至りて、互に、交際あり。之れを、朋友の始めとなす。斯の如くにして、夫婦、父子、兄弟、朋友の彝倫、爰に始めて備はりしと雖も、此時に當りては、陰陽二柱の神は、夫婦、父母の始にして、其以下の夫婦、父子、兄弟、朋友、四倫神の諸神を統率し給ひしを以て、此二神、自然に、君主の地位に立せ給へり。されど、其後、伊弉册尊は、黄泉國に入らせ給ひ、伊弉諾尊は、天上に復命して、日稚宮に留らせ給ひしかば、此陰陽二神に代りて、他の、四倫の神等を統治すべき神の無きを得ざるを

以て、皇祖天照大御神は、皇孫瓊々杵尊をして、此の土に君臨せしめ給ふ。是に於て、長へに、皇孫尊、及び、其子孫は、君となり、他の諸神、及び、其子孫は、臣民となり、始めて、君臣の大倫定まり、上の四倫の上に、君臣の大倫を加へて、五倫、全く大成するに至れり。之れを、上に、神明、人に賦するに、彝倫の大道を以てすることは云はれたる也されば、神明の、人に賦與し給ふ所のもの、有形にしては、彝倫あり。無形にしては、大道あり。之を無形に取て有形に行はしめ、其平和幸福を進め、生存發達を遂げしめむとし給ふの神意たるを知るべし。故に此の大道は世界の如何なる國にありても、男女ありて夫婦となり、夫婦、子を生て父子となり、また其子の出生の前後によりて、兄弟となり、兄弟の子孫、朋友となり、また之れを統治するものありて、君臣となるに至りては、更に、變ずることなし。

凡そ、人の、人たる所以のものは、全く此の彝倫の大道明なるに在りと知るべし。鴉に三枝の禮あり、鴉に反哺の孝ありと雖も猶人に如かざるものは他の

四倫を備へざれば也。猩々能く物を言ふと雖も猶獸類たるを免れざるものは、彝倫を知らざれば也。善惡の標準是に由りて定まり、人類の幸福安寧も、亦之れに依りて立つ。されば上に、また、之れを喩へて、天道の循環して、長へに其軌を易へざるが如しとは云はれたるなり。天に天道なくむば、世界粉碎し、萬物滅燼するが如く、人に、彝倫なくむば、君臣相賊し、父子相背き、夫婦相爭ひ、兄弟相鬩ぎ、朋友相鬪ひ、國家、一日も存在すべからざるに至る。豈に恐れざるべけむや。

天道は、誠を以て立つ。日月旋轉して、四時行はれ、善惡邪正の行爲によりて、榮泯輸贏の報差あるものは、天道の誠なり。人道、亦、誠の一字に歸す。日用彝倫の上より、百般の行爲、全く誠の外に出でずと知るべし。されば、人類、互に接し、互に相交はり、其道を盡すの上に於て、其方面の異なる所、名目の差なき能はず臣子の君父に對するを、忠孝と云ひ、長上の、弟子に對するを、慈友と云ひ、夫婦

に在りては和順と云ひ朋友にしては信義と云ひ、一般人類の相對する間にしては仁愛と云ひ、或は之を約して、義、別、親、序、信といふと雖も、其意一のみ。是を以て要は自己の意を誠にして他に對するの謂に外ならずと謂はれたる也。若し、夫れ、君臣の義に至りては、尤も重く、五倫の首要を占むるものなるを以て、特に、上に、一章を設けて、之れを規定せられたる也。凡そ人學ぶにあらざれば、其理を明にすること能はず、其の理を明かにすと雖も、之れを行ふにあらざれば金言眞理も、諧謔に値せず。されば、本教の教徒たるものは、教祖の意を服膺して、博く學び、篤く行て、人生の本分を全うすべき也。

第五　修德章

本章は、德性天稟の根本を說きて、修德は、明倫成人の基趾なるの意を明にせらる。

天神の人に賦與し給ふ神魂の靈光、之れを、德と云ふ。即ち、良心の本元にして意識の根抵也。人の、之と稟くるや素より、至粹至醇なりと雖も、事物の薰染により て、清濁の差無きこと能はず。其濁れるものは、白玉の暈翳を帶ぶるが如く其清きもの、亦た、人の嗜好により、他の誘惑によりて、物欲の情、時に、之を蔽障すること、猶塵埃の明鏡を玷褻するが如きものあり。是を以て、各人、其睹ざる所に戒愼し、神明の照鑑を畏れ、幽冥

の洞觀を耻ぢ、物欲を抑制して常に、其意を誠にし天賦の靈光を全うすべし。蓋し、修徳は、成人の要旨にして、明倫の基趾たるを以て也。

謹みて案ずるに、神明、人に賦與するに、靈魂を以てし、發動窮りなきの妙用を具へしめ給ふ。之れを徳といふ素より至粹至醇にして白玉の玲瓏たるが如く、明鏡の皎赫たるが如きものあり。即ち、明徳を以て、應事接物よりして、日用彝倫の上に行ふや、恰も神明の、灼爍たる明徳を以てして造化生育の妙用をなし給ふが如く、洞達、貫通、到らざるなし。されば、上に、是を、良心の本元にして意識の根柢なりとは説かれたるなり。此の意識の命ずる所によりて動き、良心の肯んずる所によりて作す、其動作を指して、善行と云ひ、其徳を指して、善徳といふ。されど、猶の薫に勝ち、紫の、朱を奪ふが如く、物として、他の觀染に感

ずることなき能はず。爲めに、神明賦與の靈光を持し難きものあり。是に於て、か、白玉の、暈翳を帶ぶるが如く、光明玲瓏の徳を失ひ、善と知りて、善を行ふ能はず、悪と知りて、悪を行ひ、また、他の、認めて、悪とするものをも、悪とせず、善とするものをも、善とせず、正邪を轉倒して、人倫を斁り、國法を犯すに至る。猶、青色の眼鏡を掛くるものゝ、始めて、萬物の、青色に見ゆるは、即ち、眼鏡の爲めたるを知ると雖も、後には、之を忘れ、愈々久しくして、萬物皆青色なりと臆斷するに至るが如し。豈に、深く慎まざるべけむや。悪人の子弟、常に父兄の悪事を目睹して其性情を化せられ、悪人と交際して、其悪事を感受するが如きは、即ち、是れ也。此の良心の本元、意識の根柢たる明徳の晦まさるゝによりて出で來る所の行爲を悪行と云ひ、其徳を、悪徳と云ふ。また、他の薫染を受けずと雖も、物欲の情に誘惑せられて、悪徳を釀し、悪行を敢てすることあり。譬へば、博奕を好むで、國法を犯し、他人の物品を欲するが故に、偸盗をなすが如きもの